

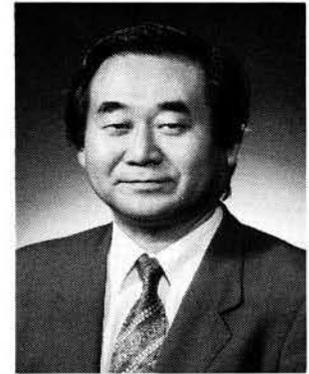
## お詫びと訂正

以下の通り、間違いがありました。関係者にお詫び申し上げますとともに、訂正をお願いいたします。

頁	(誤)	(正)
3	・岩岸 徹・浦野 愛・	・岩岸 徹・岩田 充宏・浦野 愛・
4	全国障害者解放運動連絡会議障害者救済本部	全国障害者解放運動連絡会議障害者救援本部
6～10	阪神大震災（復興の歩み）	阪神・淡路大震災（復興の歩み）
8	(誤)	5月28日   サハリン大地震
		6月1日   「震災から学ぶボランティアネットの会」初会合に参加
	→ (正)	5月28日   (サハリン大地震) ※DVNの活動に関係するため、この欄に掲載 6月1日   「震災から学ぶボランティアネットの会」初会合に参加 4日   大阪府内の避難所閉鎖 6日   DVN全体会 11日   震災で統一地方選挙を離脱した兵
11	半焼	半焼以下

はじめに

同朋大学長 畝部 俊英



1995年1月17日早朝、愛知県豊田市に住む私も地震で眼を覚まされた。寒くはあったが起きて、テレビのスイッチをひねった。テレビは地震の発生は知らせていたが、どこが震源地かつかめていないらしく、被害の状況は画面に出なかった。それが、阪神地方と淡路島を直撃したマグニチュード7.2の大地震であり、現代都市・神戸の壊滅的状況やあちらこちらから上がっている炎と黒煙のすさまじさが、ヘリコプターによって空から映し出されるに及んで、これは大変な災害であると、息を飲んだ。多く人々が突然の恐怖に襲われ、震災の犠牲となられ、家を失い、困苦のどん底に陥れたことは、その後の報道が次々と伝えてくれた。

このような状況の中で、我が同朋大学では、後期定期試験に入っていったのであるが、一部の学生から震災地へボランティアとして参加し、「何かしたい」との声があがった。大学当局もそれを受けて、大学の現況で可能な限りの努力をすることとなった。2月5日から3月31日まで、無償で提供された大阪・難波別院の本堂下の宿舎を対策本部として131人、延べ1452人の学生と教職員が活動に当たったことの詳細な報告はこの文集に見られるごとくであるが、参加した、ある学生の「これから大学で、自分が何を学ぶべきかということがよく判りました」という言葉に大変感銘した。社会参加や現場での実習・実践こそ、大学での学びの確かな方向や目的を主体的に明らかにしてくれるものであり、また本学の建学の精神である、同朋精神の実践でもある。これからの本大学の進むべき方向として、また高齢化・国際化のすすむ21世紀に向けて生きる社会人として、ボランティア活動は、ますます重要性を持つことになると思う。

さて、95年度の新学期を迎え、震災地へのボランティア活動に参加した学生たちの中から、この活動を一時的なものせず、情報の収集・発信、ボランティア組織間のネットワーク作りへの参画、息の長い、幅広い活動などを旨として、「同朋大学ボランティアネットワーク(DVN)」が設立され、今日に至っている。これまた、この文集において、その活動状況が報告されているごとくである。

震災より1年以上経過した現在、DVNの活動も総括や反省、今後に向けての在り方など、様々な問題があると思う。この文集は、その意味で、今後の活動の一里塚または新たな出発点となるものと心より期待している。

最後に、難波別院の暖かい御理解をはじめとして、多くの方々の有形無形の御支援、活動に参加された学生・教職員の御苦勞にたいして、衷心より御礼を申し上げます。 合掌

## 発刊の言葉

1月17日に起きた、阪神・淡路大震災は私達に大きな影響を与えました。「何かしたい」という思いから、2、3月に自分達の意志で現地での活動を行ってきました。

4月からは、同朋大学ボランティアネットワーク（DVN）として名古屋からできる支援活動を中心に行っています。そして支援活動は2年目を迎え、これからも変化していくニーズに合わせ、必要な限り続けていくつもりです。

何がこんなにも支援活動を続けさせるのか……。

被災地から一步離れれば、震災のことなど忘れてしまいがちです。復興状況が伝えられていても完全な復興を遂げたわけではありません。「私達にできることは何だろう」「できることをしよう」そんな思いで支援活動を続けている人が多いのではないのでしょうか。

この『忘れない～阪神・淡路大震災 同朋大学一年間の軌跡～』は、阪神・淡路大震災を忘れてはいけない出来事として後々まで伝えていきたいという思いと、ボランティアとして現地で活動した人達の様々な思いを自分の中に閉じ込めておくのではなく、より多くの人に知ってもらい、改めてボランティアというものを考え直してみたい、という思いを込めて作りました。

これは、名古屋から出来る支援のほんの一部に過ぎません。しかし、震災に対する意識が薄れつつある中、もう1度思い返してみるためのきっかけとして、また、新たなボランティア活動への一歩として、より多くの皆さんに読んで頂き、何かを感じとってもらいたいと思います。

同朋大学ボランティアネットワーク  
感想文集制作班責任者 廣瀬 結子

# 忘れない ～阪神・淡路大震災 同朋大学一年間の軌跡～

## — も く じ — (50音順 敬称略)

はじめに .....	同朋大学長 畝部 俊英 ..	1
発刊の言葉 .....	廣瀬 結子 ..	2
DVNの設立まで .....		4
第1章 <b>軌跡</b> PART 1 .....		5
第2章 <b>喜怒哀楽</b> .....		13
現地で活動が続ける中、自分達の想いをノートに綴ってきました。 そのノートより幾つかを抜粋し、またその後、現地での実際の活動 について地図をまじえて説明してみました。		
第3章 <b>軌跡</b> PART 2 .....		29
第4章 <b>異路同帰</b> .....		39
阪神・淡路大震災後、私達は様々な活動を含め多くの人々の心に触れて きました。それぞれが何かを感じ、それを自分の中に閉じ込めておく のではなく、より多くの人に知ってもらい、これからの活動に活かし ていこうという旨で、寄稿していただきました。		
石原 雅矢・岩岸 徹・浦野 愛・大上 智恵・小沢 朋子 河合 琴乃・北鬼江 慶子・小柳 泰子・坂井 敏子・鈴木 由里子 高橋 サチコ・滝川 裕康・竹内 務・塚本 直人・半谷 由紀子 平松 恵美子・牧野 茂・間杉 宗臣・宮嶋 智也・山田 卓由		
第5章 <b>教学相長</b> .....		75
教えること、学ぶことがお互いに作用し合って長足の進歩をとげる。 そうありたいと願い、学内の教職員の方々に寄稿していただきました。		
尾畑 文正・栗田 暢之・玉井 威・西沢 信正 丹羽 丈司・馬場 雄司・吉村 公夫		
編集後記 .....	松田 耕治 ..	93

## DVNの設立まで

1995年1月17日午前5時46分に淡路島北淡町を震源地とする、マグニチュード7.2の大地震が起こり、阪神地区に大きな被害を与えました。

地震発生の後、本学生2人からボランティアの申し出があり、これを受けて学校側は被災地出身の学生への対応やボランティアをする学生への指導などについて話し合い、対応策をまとめました。

現地でのボランティアの宿泊施設として、大阪市の真宗大谷派大阪教務所（難波別院）が無料で引き受けて下さいました。活動先は障害者を対象に大阪ろうあ会館、大阪障害者センター、全国障害者解放運動連絡会議障害者救済本部の3つに絞りました。

これらの準備の後、2月1日にボランティア派遣の説明会を開いたところ、募集に応じた学生は108人で、中には被災地出身の学生もいました。こうして2月5日に第1陣が2月13日には第2陣が出発し、3月31日まで活動を行いました。

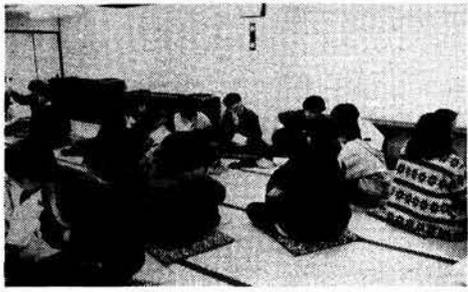
このように、2、3月のうち実際に被災地へ足を踏み入れ、これからも長期にわたる支援が必要だと肌で感じてきた私たちは、今度は名古屋から何らかの形で出来る震災支援を続けていきたいという思いから「同朋大学ボランティアネットワーク（DVN）」を発足しました。

私達はDVNの活動として

- ①阪神・淡路大震災の関連するボランティア活動の実践と、それを行うための情報の収集及び発信等。
- ②阪神・淡路大震災に関連する他の組織とのネットワークづくりへの参画等。
- ③ボランティア全般に関する情報センター的役割への試行及び将来的な実践等。
- ④ボランティア全般に関するその他の活動等。

以上のことを趣旨とし、震災支援はもちろんのこと、その他にも他方面からのボランティアにも力を入れていきたいと思っています。

同朋大学ボランティアネットワーク

	阪神大震災（復興の歩み）	DVNの活動	
1月17日	午前5時46分、淡路島を震源地とするマグニチュード7.2の直下型大地震が発生。被害は兵庫県や大阪府を中心に2府、12県に		
18日	死者2,000人を超す。23万人が学校などで避難生活		
19日	政府が緊急対策本部を設置		
20日	気象庁が神戸市三宮など3カ所の震度を観測史上初の震度7(観)に変更		
22日	政府が神戸市に現地対策本部を設置		
23日	死者が5,000人に達し、兵庫県内の避難生活者が最大の31万6,678人を記録		
27日	神戸市で仮設住宅申し込みが始まる		
28日	兵庫県警と自衛隊が不明者の一斉捜索。政府が倒壊家屋解体の公費負担を決定		
31日	天皇皇后両陛下が現地を訪問、被災者を激励		
2月1日			ボランティア説明会
2日	仮設住宅入居開始		
5日		ボランティア第1陣出発（学生31名）難波別院内に「同朋大学大阪対策本部」を設置	
7日	気象庁が新たに神戸市須磨区から西宮市にかけてを震度7地域に		
13日		ボランティア第2陣出発（学生44名）	
16日	神戸市営地下鉄が全線開通		
17日	震災発生から1カ月。死者5,300余人、依然約21万人が960カ所で避難所生活		
22日	復興基本法成立		
26日	西宮、芦屋両市で合同慰霊祭		
28日	震災復興対策費1兆223億円を含む政府補正予算案が成立		

阪神大震災（復興の歩み）		DVNの活動
3月 1日	神戸市三宮の地下街営業再開復興へ	
6日	兵庫県内の避難者が10万人を割る	
7日	震災で内定取り消し学生を対象とした就職支援面接会が大阪で開催	
8日	死者5,469人、行方不明2人、負傷者3万6,711人、全壊家屋9万2,905棟、半壊家屋8万5,657棟、焼失家屋7,488棟に上る。被害概算額10兆2,192億円	
14日	神戸市都市計画審議会が計画案を承認。ボランティア延べ100万人に	
25日	甲子園で選抜甲子園大会開幕（華やかな応援自粛）	
31日	震災失業者1万3,000人超す	難波別院内「同朋大学大阪対策本部」を撤収
4月 1日	JR東海道線全面復旧	「同朋大学ボランティアネットワーク（DVN）」を設立
8日	山陽新幹線全面復旧	
8～10日		芦屋市を中心に活動（引っ越しのお手伝い）
11日	「阪神淡路大震災復興宝くじ」発売。ガス復旧作業完了	
13日	兵庫県内の外国人死者は9カ国、179人に	
15日		同朋大学ボランティア体験報告会
19日	兵庫県内の避難者数5万人を割る	
27日	自衛隊が完全撤収。史上最大の延べ210万人が出動	
29日		チャリティーバザー（同朋大学）
5月 3～7日		芦屋市、神戸市長田区、東灘区で活動（応援する市民の会などで活動）
11日	震災原因の生活保護申請539世帯	
14日		あしながPウォーク10（阪神大震災遺児・病気遺児のためのボランティアウォーク、チャリティーバザー）

	阪神大震災（復興の歩み）	DVNの活動
5月23日	義援金2次交付。仮設住宅8,300戸追加建設決まる	
25日	神戸市長田区の菅原市場が共同仮設店舗で営業再開	
27日	仮設住宅で独居老人が死後1カ月で発見される。以来、同様の孤独死が相次ぐ	
28日	サハリン大地震発生	
6月1日		「震災から学ぶボランティアネットの会」初会合に参加
4日	大阪府内の避難所閉鎖	
11日	震災で統一地方選挙を離脱した兵庫の5地方選で投開票。神戸市議選の投票率45.23%で史上最低	
12日	阪神神戸線が全線開通	
20日		「震災から学ぶボランティアネットの会」第2回会議に参加（以降毎回参加、現在に至る）
26日	阪神電鉄が復旧。六甲ライナーを除く被災地の鉄道網が全面開通	
30日	神戸市が復興計画正式決定	
7月2日		学生ボランティア連絡会議に参加
6日	大雨で神戸・六甲山麓に避難勧告	
7～8日		同朋大学・夏まつりにバザーで参加
8日	兵庫県が660事業からなる復興計画「ひょうごフェニックス」を作成。総事業費約17兆円	サハリン大地震救援募金（学内にて）
9日		サハリン大地震救援募金（名古屋駅前にて）
18日	国の防災基本計画、32年ぶりに抜本改定	
31日	ポートライナー全線開通	
8月11日	避難所閉鎖は人権侵害と救済申し立て	
17日	大震災から7カ月。全国から寄せられた義援金は約1,700億円に上る	

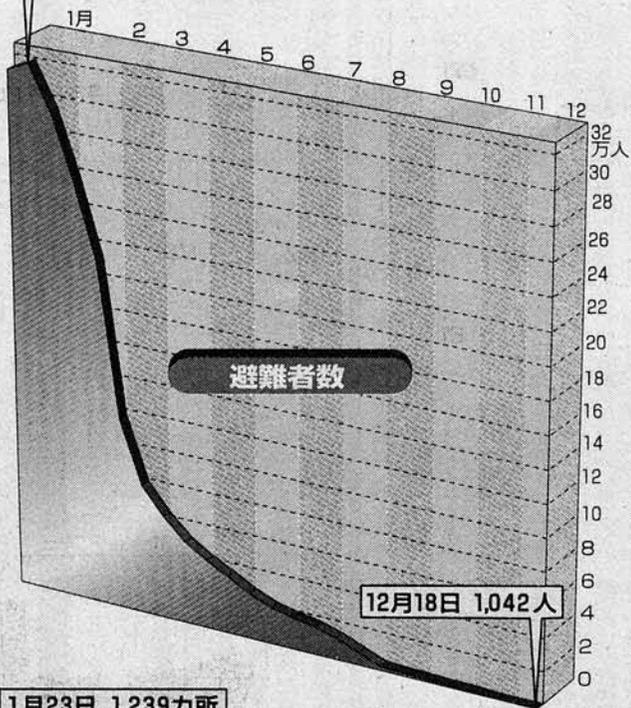


	阪神大震災（復興の歩み）	DVNの活動
8月19日		「震災から学ぶボランティアネットの会」チャリティーバザーに参加（東別院にて）
20日	神戸市の避難所閉鎖	
21日	避難者5,000人を割る	
23日	六甲ライナー完全復旧により被災地の鉄道網は全面開通	
27～29日		「震災から学ぶボランティアネットの会」被災地の子供たちを招いて岐阜県白川町でのキャンプに参加
9月1日	阪神高速湾岸線が全面復旧	
4～10日		芦屋市・西宮市で活動（仮設住宅ふれあいセンターにて）
13日	労災死多発で兵庫労働基準局が非常事態宣言	
30日	最後の避難所閉鎖（西宮市の2世帯）。西宮市が全避難所閉鎖宣言	
10月2日	災害援護資金貸し付け再開	
17日	神戸市内の待機所、旧避難所で、1906人が暮らしている。兵庫県が住宅地震災害救済保険制度案を提出	夏休みの活動報告会
22・29日		あしなが学生募金に参加
11月2～5日		同朋・名音合同祭に参加（阪神・淡路大震災に関する展示）
6日	神戸市が希望退職などリストラ案を出す	
11～12日		「震災から学ぶボランティアネットの会」福祉フェスティバルあいちに参加（仮設住宅を再現）
12日		あしながPウォーク10に参加
25日	近畿・四国の10府県が、初の合同防災訓練	
12月3日		「震災から学ぶボランティアネットの会」クリスマス会募金に参加
6日	神戸市が旧避難所の住民に撤去要請	

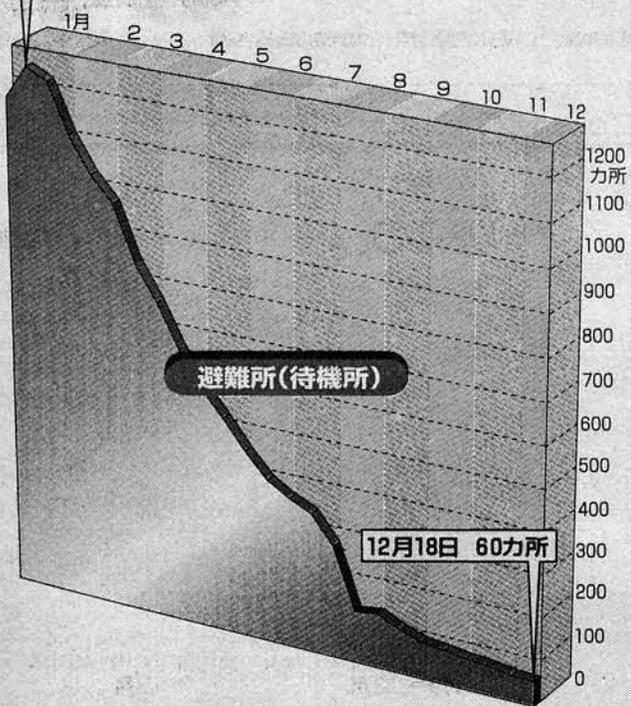


# 避難所と避難者数

1月23日 319,638人



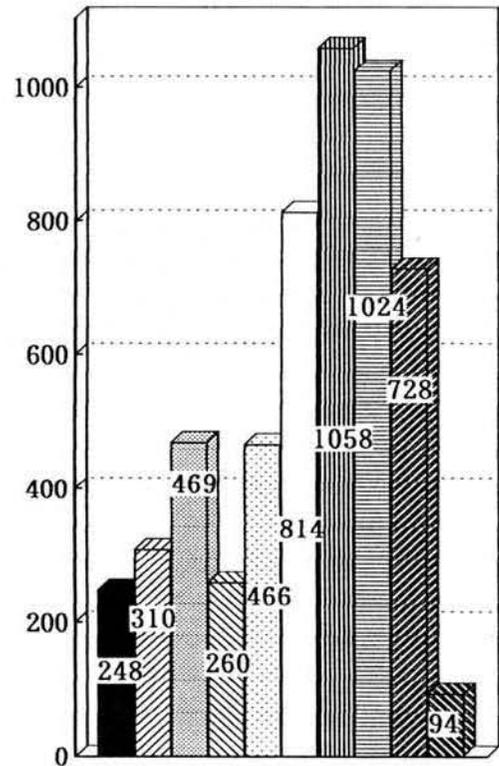
1月23日 1,239カ所



## 兵庫県内の年齢別死者内訳

(県庁調べ分)

■ 10歳未満    ▨ 10代    ▩ 20代    ▧ 30代    ▦ 40代  
 □ 50代    ▤ 60代    ▥ 70代    ▪ 80代    ▫ 90歳以上



### 被害状況

(兵庫・大阪・京都)

死者	6,308人
不明	2人
負傷者	38,495人
全壊	106,247棟
半壊	130,334棟
全焼	7,050棟
半焼	424棟

◀ 1996年1月10日現在 ▶

以上すべて『朝日新聞』1996年1月16日版より



2月20日

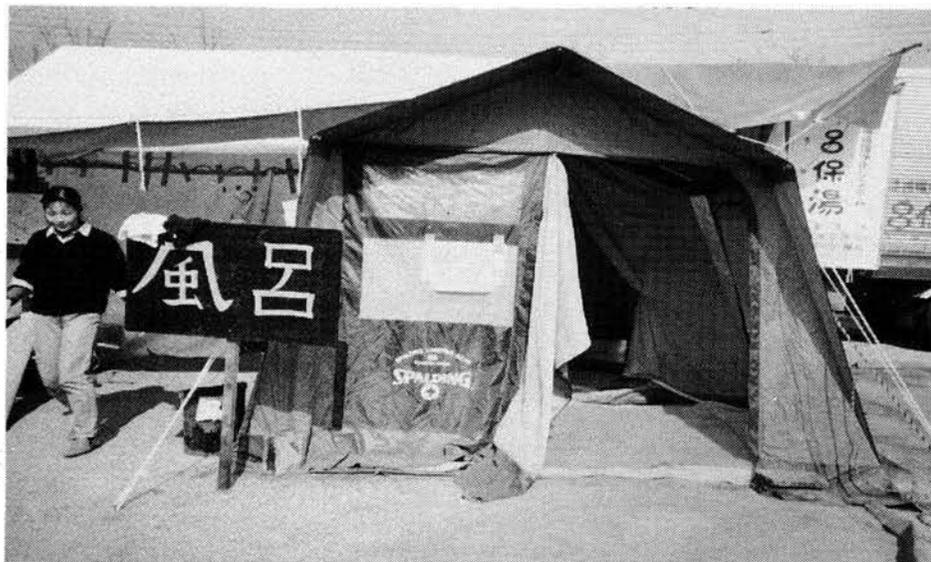
私は、1週間宝塚市役所でボランティアをして様々な人に、また、その背景に出会いました。多くの友人もできました。家が全壊、半壊しているのに、市のボランティアで働いている人、全国からボランティアのために来ている人、企業ボランティアで来ている人 etc……。一生懸命でした。中でも私が1番に感じたのは、市役所の皆さんも宝塚市民であり、被災者であるということでした。

苦情や文句を言う人も市民であり、それを受け止める方も市民なのです。最初、市の対応が悪いな、と思いましたが、それは大きな間違いだと、このボランティアに参加して気づきました。

このボランティアにこれから参加する人は、この事を考えた上で市役所の人を観てあげてほしいのです。

今、宝塚が自分たち（市民）の力で立ち上がろうとしています。もうそうしてもいい頃です。1カ月が経つのですから、それを助けていけるようなボランティアを行ってください。手を出しすぎず、でも支えるような。

今、避難所への泊まりのボランティアを2つ行っています（断続）。ここも同じように自立しようとしています。もし仕事が打ち切りになる（良い形で「もうこんなボランティアなら来なくていい」と言われて切られるような形ではなく）としてもそれは喜ばしいことなので皆で笑顔で去ってください。私たちボランティアが早くいなくなれるようになるのが本当に望ましいと思います。



## 2月下旬

ろうあ会館での主な仕事は事務的なものや仕分け作業で、私が想像していた「被災地でのボランティア」とは全然違ってとても地味な仕事ばかりでした。でも、活動を続けていくためにどれだけ多くの人々が安否情報を知りたがっているかということが分かって、私たちも頑張らなきゃいけないという気持ちになりました。デスクワークも仕分け作業も最前線での活動も、大切さはどれも一緒なので再合流してもどんな仕事でも頑張ろうと思います。個々での仕事は速さより正確さが求められているので、これから先、活動する人達も焦らず無理せず頑張ってください。

手話ができるできないに関係なく、ろうあの方と交流を深めるいい機会だと思うので、できる人は手話で、できない人も“ジェスチャーゲーム”だと思い頑張ってみてください。ジェスチャーで大抵のことは通じると思います。もし無理でも口話で通じますので、口ははっきり開けてゆっくり話すようにすれば、必ず通じます。（ろうあ会館の職員の方は皆さん、私達学生ボランティアにろうあ者をもっと正しく理解してほしいと願ってみえることですし…）

芦屋市を歩いて廻ってみて（ろうあ者、健聴者に関わらず）被災者の方が10人見えたら10人全員が私達ボランティアを歓迎してくれるとは限らないということに改めて実感しました。これから先、被害の大きかった地域へ行っての活動もあると思うけど、このことは覚えておいてもらいたいなと思います。

今回ボランティアに参加して、TVや新聞からでは分からない部分を知れたことや、ボランティアについて考えるいい機会になったことは良かったと思います。今後のボランティアや実習の時に、今回の体験を生かすことができればいいなと思います。

これから活動する人も無理しないように頑張ってください。

3月3日

今日は諸橋さんと2人で活動しました。ろうあ会館の仕事を引き継いで3日目になります。震災から1カ月以上経った今でも物資は送られてきます。しかしそれも少なく、1つの仕事が終わってしまえば、次の仕事を考えて考えてやっとのことで見つけ、それもすぐ終わってしまい、はっきり言って暇な時間が多いです。けれども会館の職員さんのことを考えれば、普段の業務に加えて、震災物資の対応をするのではあまりに忙しすぎます。だから私達は必要とされている限りお手伝いに行くのですが、それだけではあまりに仕事が少なすぎます。

こんな言い方をしたら疲れて帰って来る人に失礼ですが、朝早くに別院を出て、疲れたと言って帰って来る人がうらやましくてしょうがない。くたくたになってもいいから仕事がしたくてしたくて。

今日はあまりの暇さに対するもどかしさと、そんな風に仕事に優劣つけている自分の愚かさに涙が出てしまいました。でも、自分で仕事を見つけて自分から進んでやれるのがボランティアですよね。会館に送られてきた物資は、私達が仕分けをして神戸ろうあハウスへ運搬されます。そして今、ろうあハウスには物資がたまっている状態だそうです。そちらの方には人手がいると思います。ろうあ会館の方と交渉して神戸入りするとか、会館に行く日を減らしてもらってその分、他の所にまわるとか、仕事を見つけてやりたいと思います。

今まで青年学級のボランティアしか経験がなく、被災ボランティアは初めてです。必要とされているところで求められている仕事をするのがボランティアだとすれば、今だ他へ行きたいなんていっている私なんてわがままです。固定観念を持ってないつもりでも、何処かに決めつけているような心があったのかもしれませんが。それが分かっただけでも今回のボランティアで何か学んだことになったのかも。



3月3日

再合流は2月28日（火曜日）であったが、夜、本部でのミーティングの時に“きつい”と評判だった郵パックの仕分け作業に指名され、正直、がっかりした。翌日も、六甲小学校の時のような意欲満々な気持ちにはなれなかった。西宮市にある厚生年金スポーツセンターの体育館の中は、西宮市宛ての救援物資で埋まっていた。男性はトラックから持ってきたり、積んだりする荷物の搬入搬出で初日はそれに明け暮れていた。「何て単調できつい仕事やろ」と午前はそう思っていた。

今日は3月3日。箱を解体して入っていた食料を出して見ると1月23日製造26日賞味期限のロールパンがペシャンコになって詰められていた。衣類では白の女性ブラウスにクリーニング店で落ちなかった黄色いシミがついたものが入っていたり……とあげればキリがないほど使い勝手の悪いモノが多数入っていた。結果的に送り手の意志が「不良品」の箱の中に入れられ処分されてしまう。送り手としては物資が滞留するとは思ってなく、また「捨てるよりは救援物資に回した方がいいだろう」という考えで送られた方もいるだろう。戦時中のモノ不足の時代を経た人や、モノを大切に人は「シミ程度なら…」と思い送られたかもしれない。けれども、ここまで豊かでモノ余り現象・使い捨て現象が進み、事物に対する要求水準の高い人が多くなった現代のニッポンでは“難”はなくても個々のセンスや考え方に合わないものは見向きもしないこともある。たとえ被災してモノが不足していても。新聞の記事で「たとえ仮設住宅が当たって入居ができたとしても、家を直してくれるなら、数ヵ月の避難所暮らしが続いても構わない」という被災者の声が載っていた。なかなか個々のニーズに応じた仕分けや配給は難しい。1日かけて仕分けをしても、また返品となって戻されてくる。こちらは「〇〇は女性上着2箱に子ども服2箱……」と箱単位で各自治体に配給する。しかし各自治体、避難所は構成している住民の年齢・性別・体格はもちろん、何が足りていて何が不足しているのか、またどのようなモノを望んでいるのか、といった個々の価値観や所有量に対する満足度にもかかってくる需要に対して、圧倒的な量の救援物資を一早く仕分けるのに必死なボランティア側はそれに応じることが十分できないでいる。返品された多くの箱（山積み）を見て「俺達の苦労は何だったんだ」と思わされることもある。返品の数多さはボランティアの労力の無駄遣いであり、交通渋滞の一役を担わせ、物資の配給を必要としている被

災者への配布が遅れてしまう。改善のための方針が早期に立たないとそして実行されないと、返品の高を見てボランティアのやる気・意欲の低下を招き、配給先で「置く場所がないから」「今は必要としてないから」などの理由で断られ各地を転々としているトラック運転手の無駄骨を折ることになり、そのように情報やニーズを的確に把握していない“西宮ボランティアネットワーク(NVN)”に対する不信感を募らせることになり、被災した人にとっても、NVNにとっても、ボランティアや運転手にとっても、何のいいこともない状態が続いてしまうだろう。

短期間であり、あくまでも肉体労働で働いているため見方の偏りはある。けれどこの作業をする前に抱いた考え方から3日目でこんなに見直しができることは自分にとって幸いだったと思う。もし、被災した人達と接するボランティア活動をしていたら、仕分け作業からこのような考えに至ることはできなかつたろう。一緒に行ったメンバーや、センターでの多くのボランティアさん達との接触から得られたことが一番の要因だろう。「職業に貴賤なし。すべての仕事は皆貴い」という言葉を思い起こす。自分は心の中でボランティアの仕事にランク付けをしていたようだ。同朋大学の救援ボランティアとして集めたボランティア要請のそれぞれの業務はすべて被災された人々の何らかの貢献をしていて、それをこなすことは、そしてその仕事に価値を見いだすことは被災された人達との真の交流につながるのだと思う。直接会ったり話したりすることのみが被災者の人達との心の輪をつなぐ手立てではない。私は今、救援物資を通して送り手の温かい心と再出発の路に立っている被災された方との橋渡しをしているのだ、という自負を持って明日も仕分け搬出入作業を頑張ろうと思う。



3月5日

昨日は、仕事がたくさんありました。午後から行われる講演会の準備のお手伝いや、パンフレットを折ったり……。

職員の方々は、普段の業務に加えて、震災関係の対応をしており、忙しくてこの日の講演会の準備ができなかったそうで、開始1時間前くらいになると本当にバタバタして忙しそうでした。そのお手伝いをしながらも、今私がすることは、本当にこの仕事なのだろうか？という疑問を拭いきれずにいた私に、職員の一人の方はこう言って下さいました。私達が震災関係にこだわらずにいろんな仕事を手伝ってくれるので、震災の対応がスムーズに出来て助かる、と。私たちは直接現地に行って被災者と関わっていたわけではありませんが、こういう間接的に関わっていくボランティアもあるのだと思い、前ページでいろいろと愚痴を書いていた自分が恥ずかしくなりました。

ボランティアは仕事を選べるわけではない。自分に与えられた仕事の意味を考え、相手が求めていることに少しでも近づけるように、かつ、自分がやりがいを感じられるようにやっていけたらいいかな。これからはろうあ会館での仕事を責任と自覚を持ってやっていきたいです。

私達とろうあ会館の今後の関わり方については、3月7日の会議で検討して下さるようで、その後に仕事を継続していくか、又は神戸ろうあハウスへお手伝いに行くか、など決まるとのことです。

どんな仕事に来るにせよ、今の自分の「動きたい、働きたい。」という気持ちを大切にしながら、自分の出来ることの精一杯をしたいと思います。でもとりあえず、いっぱい仕事があるといいな。

ろうあ会館で仕事をしていてよかったと思うことは、まず1つ、尊敬できる人にたくさん出逢ったことです。忙しい通常業務に加え、震災の対応をしながらも私たちボランティアにも気をつけてくれる職員の方々。ただ優しいだけじゃなく、しっかり言うべきことは言って下さるさっぱりした人が多かったです。それと手話の出来ない私にも気軽に話しかけてきてくれて、手話も教えてくださった聴覚障害者の方達。みなさん活発にいろんなことに取り組んでいます。

もう1つは、聴障者の活動や状況について少しでも知ることが出来たことです。体育大会やスピーチ大会、サークル活動など積極的に活動していることに驚きました。

1つ深く印象に残ったことは、地震の時に、聴障者に入ってくる情報があまりにも少なすぎたということです。電気が切れてファックスが使えない、テレビ、ラジオ放送は聞こえない、避難所のファックス設置が遅かった、救援物資は配付の放送があったが、聞こえず取りにいけなかった。報道番組で唯一手話通訳を付けていたニュース番組が地震報道の

ために一時中絶された、など、数多くの問題があったということです。点字や手話が自然に使われて、障害のある人も無い人も、当たり前交流できる世の中になればいいのに。

あさっては神戸市立盲学校で炊き出し。初めての現地入りです。

自分の仕事をきちんと、かつ楽しくこなせるように頑張らしましょう。

3月7日

「初心を貫け」という言葉を知っていますか？

僕がこの一週間を顧みて思ったことです。僕がこのボランティアに参加したのは、みんなと同じように「何かしてみたい」と思ったからです。参加してよかったなとすごく思います。ここの生活で実にいろいろなことを感じて、考え、思いました。

ここに来ている人達は、一人一人がとても一生懸命なのだと思います。それ故に、色々な事で意見の衝突があるのだと思います。只一人一人が思ったこと、感じたことを皆んなに言わなくちゃいけないなと痛感しています。ミーティングが皆んなの感じたこと思ったことを言える場にしなくちゃいけないと思うし、そういう雰囲気を作っていかななくちゃいけないと思います。

僕らは自らの意志でこのボランティアに参加したはずで、その自らの意志を大切にしてください。どんな些細なことでも感じたこと、思ったことを大切に、自分の意志を皆んなに伝えましょう。

ミーティングが事務的だからかも知れませんが、だからこそ自分の意志まで事務的にしてはいけないと思うのです。自分で感じて、自分で考え、そして動くことです。

僕等は自らの意志で参加したという「初心」を最後まで貫かなくてはなりません。

これが僕がこの一週間、反省し、学んだことなのではないでしょうか。先ずは自分から変わっていかななくては……と思います。

最後に、郵パック、尼崎あぜくら作業所、川崎製鉄、33の日(耳の日)記念大会で、人のあたたかさに触れられて本当に良かったと思います。

3月12日

今回ボランティアでここに来て改めて、ボランティアって何かを考えさせられたことが何度もありました。でも今、介護とかのボランティアを通じて「ボランティアとは……」なんて定義づける必要はないと思うようになりました。私達には何かを考えて行動すればそこには色々なことが付いてくると思うんです。予期できないようなことも……。昨日、(11日)のミーティングである方が言ってみえたことです。すごく納得させられたことがあるんですが、頭で考えるより心で……ということです。ボランティアって本当、心ですよ。参加しようと思った動機は何だっていい、純粋に「何かをしたい」ってそれだけで十分だと思います。初め私は『ボランティアで学んだことは沢山あった。』という自分のそんな気持ちも結局は自己満足なんじゃないかな、とっていました。でも純粋に「何かをしたい」と思ってきた、ただそう考えてやってきた気持ちにそういう思いが生まれても、当然かなってちょっと思うようになりました。冷たい言い方かもしれないけど、どれだけ私達が被災地に行って被災者の方の気持ちを少しでも……と思っても、あの地震を経験し、大切なものをなくした方達の心を本当に分かることは無理だと思います。「頑張ってください。」と言ってもその言葉はなんて空々しいのでしょうか。でもだから偽善だ、というのはちょっと違うと思います。偽善だとかの問題の前に純粋な気持ちがあればいいのではないかなあ。

人には沢山の気持ちがあるんで、たった1人だってそんな沢山なのにもっと人が集まったら気持ちはもっともっと沢山の、すごく難しくなってしまうけど、その時その時一生懸命考えた気持ちに間違っているということはないと思います。



3月13日

2月13日から1カ月間。こんなに長いのにあっという間だった気もする。自分がこんなに考えさせられた時期ってあったらどうか。いろいろな人とたくさん出会って、いろいろなことをたくさん話して、ありきたりだけどやっぱりいろいろなことをたくさん感じた。めちゃくちゃ苦しかったし、悩んだり、涙が何度か出たりした。でも楽しくてしょうがなかったり、別れが辛かったりした。

神戸での1カ月間をこんなあいまいな言葉だけで表現してはいけないかもしれないが、こうしてまた名古屋へ帰ってもとの生活に戻ると思うと、こんなに自分をつめこんだ1カ月間がまぼろしのような気がしてならない。1人暮らしの自分に戻っても、自分のいた1カ月間の被災地や避難所生活は事実だし、それを越えた私が、その時感じたことをこれからいろんな所で生かしたり、関わってくるのも事実だ。

とにかくいろんなことを考え過ぎて、あれこれと考えがあって、1つにまとめられなくて、1日分の報告書でさえかけなかった。出来事すべてが重要だった。私はものすごく充実していた。私に関しては、今はそう思える。ただそこに他の人、周りの人に対して「ボランティアとは」とか「偽善」とかいうことを考え出すと、また個々の意見が問われる。考えて考えて、答えも結論も出ないまま動いていた。答えも結論もいらなかった。そのつど感じ、そのつど考え、自分が行動していた。そして、体で実際に感じたことは気持ちの上で残り、言葉では上手く表せないけど、「やってみる」ことが今の自分を残した気がする。

ボランティアをされていてその最中にこれを書いたら、状況やそのつど感じたことなど密着していると思う。でも今ボランティアを終えて離れて見てみると、こんな風に思えた。

明日思うことはまた少し違ってくると思うし、まだまだ気持ちはあふれてくるけど、今はこれだけです。

3月15日

ここへ来てから2週間、いろんなことを考えたと思う。思うことは、1日1日が変わってきたし、ほんの数ページ前に書いたことも、今感じていることと同じ部分もあるし、違う部分も多い。こうして最後にノートを書いても、何から書いていいかわからないくらいいろんなことを考えて、でも私にはまだはっきりしたものは生まれてきていないんだけど、それは、無理にこうと決めつけることはせずにいようと思う。

これだけの人の入れ替わりの激しい中で、みんながその時その時の状況を把握していくのは難しい事だと思った。しかも、現地で活動する人と、大阪で間接的に仕事をする人がいて、お互いの考えていることが分からない。自分の行った所のことしか分からないのは当たり前だけど。でも、分からないなら聞けばよかった、話せばよかったんだ。分からないことや、疑問を感じることもあっても、誰も何も言わなかった。

もちろん私も。自分自身に関して言えば、状況も分かってないままで、無理矢理答えを出そうとして、考えて考えて、でもそんな状態じゃ何も見えてくるはずがないから、よけい自分が見えなくなったんじゃないかと今は思う。何も聞こうとしないまま考えすぎて、いろんなことを受け止める感性が鈍ってしまっていたような気がする。

何のために6千人もの人が死ななければならなかったのか、10数万人の人が苦しい思いをしなければならなかったのか、ショックで悲しくて、顔も見たこともない沢山の命がとて愛しくて、何か出来る限りのことはしたい。そう思ってきたけど、私は、出来る限りのことをしたとは思えない。

何かを得るために行こう、という思いはそんなに大きくはなかったのだけれど、2週間経ってみて、私は与えたのではなく、受け取る、得るばかりだった。

でもそんな団体行動の難しさや問題点も、未熟な自分に沢山出会ったことも、こうやって行動を起こしてみたから分かったこと。ただそれに気づいただけで終わらせないように次につなげていきたいと思う。別に震災ボランティアに限らなくても、ここで感じたことを活かせる場はいっぱいあるような気がする。

まだ見えているものが少なすぎる私は、全体の意見なんて言えないけれど、とりあえず今思うことは、被災地が早く元気になってほしい。これです。頭で考えたことはいっぱいあったし、ボランティアの立場や、やり方についてもいろんな意見を聞いてその都度考え込んだけど、心で感じていることは結局、ここへ来る前と同じことだった。

今までいろんな災害を目にして、その時は大変なことだと思っても、だんだん風化していつってしまったけど、このことだけは忘れないと思う。街が元気になっていく様子を花に見てほしくて、どこかに種をまいて帰ろうと思ったけど、やめた。私自身がまたここへ来るから。何年後かわからないけれど。

最後に、私も含めた日本人のボランティアに対する考え方が変わればいいな、と少しだけ思う。

---

地震があった

人が死んだ

人が泣いた

今まで築き上げたものが

今まで当たり前にあったものが

一瞬にして無くなった

地震があった

人が死んだ

人が泣いた

でも今、人が立ち上がろうとしている

街が立ち上がろうとしている

地震があった

人が死んだ

人が泣いた

忘れない

3月17日

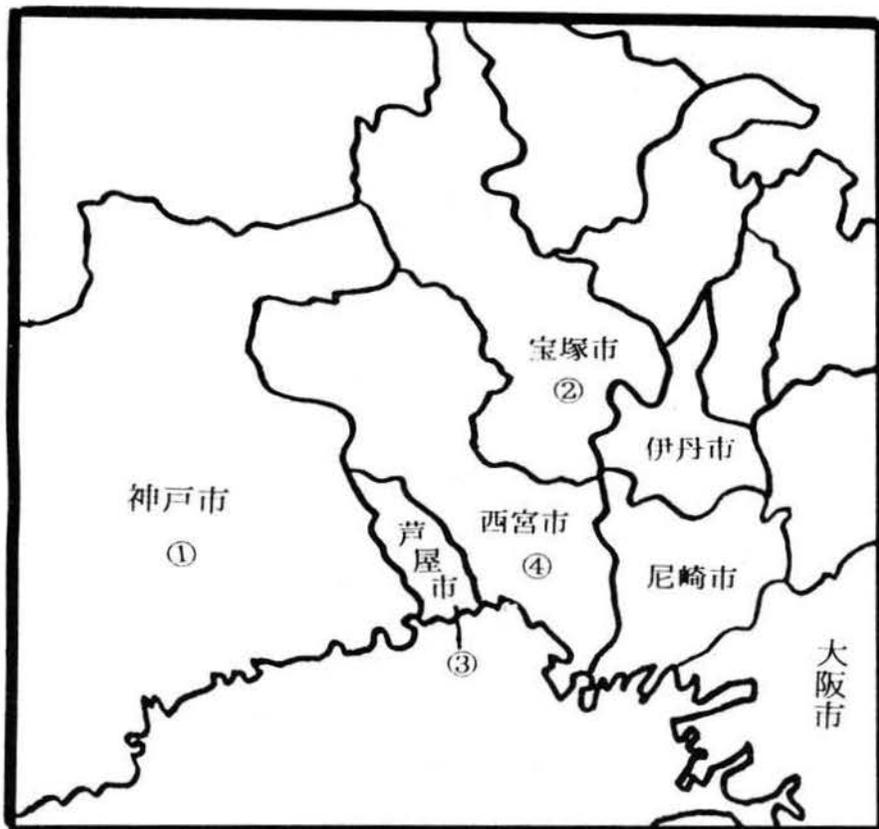
私は西宮で地震にあって、初めて“明日の见えない不安”というものを感  
じました。私が避難していたところで初めてボランティアさんらしき人(?)を見た時、  
“ボランティアをしようというその心の余裕が欲しいねん”と思ったような気が  
します。今、皆さんに明日は见えていますか？ 心の余裕はありますか？ 多分、  
精神力のギリギリの部分で、手さぐりでボランティアをされてきたんだと思いま  
す。そういう経験をされた皆さんと被災者とはもっと深い部分でつながっている  
んだと思います。だからもっと自分に自信と誇りを持って下さい。“神戸や芦屋、  
西宮などで何かしたい”と思うだけで素晴らしいことだと思えます。それが、そ  
ういう気持ちが行動となるのは、すごく勇気のいることでしょう。

皆さんは、いずれ自分の帰るべき所へ帰る人々です。皆さんがもしボランティ  
アをした意味のようなものを考えるのであれば、自分の家に帰ったときに“また  
神戸に行きたい”とか“あの避難所はどうなってるのかなあ”とか思うことがす  
ごく意味があって、一番大切なことなんだと思えます。そこからまた新しい何か  
が生まれるでしょう。

自分のことは後回しにして、ボランティアをしたいと思う人もいてはると思  
いますが、あんまり気負わないで、ボランティアというものに関わる前の自分達の  
生活も大切にして下さいね。これから3年、5年、10年後に“あのとき、神戸  
でボランティアをしてよかったなあ”と思えるようになってくれたらうれしいで  
す。私も“被災して、ボランティアしてくれはった人に会えてよかったなあ”と  
言える人になっていきたいです。



# 《 兵庫県 》



## ① 芦屋市ボランティア委員会

2/14～2/22：9日間

- ・ 損壊建物の調査補助
- ・ 避難所の子どもの話し相手
- ・ 避難所となっている山手中学校、三条小学校で活動
  - ・ 電話対応・プリント配布・炊き出し
  - ・ 救援物資の管理、仕分け、運搬・コンサートや映画上映などの手伝い・理容師さんの手伝い
- ・ 建物危険度判定調査の結果報告、電話対応、リストアップ

## ② 宝塚市ボランティア委員会

2/14～2/28：15日間

- ・ 引越しの手伝い
- ・ 救援物資の運搬、仕分け、手伝い
- ・ 子どもの遊び相手、保育のボランティア
- ・ 避難所となっている御天山中学校で活動
  - ・ 炊き出し・ゴミ出し・清掃作業
- ・ 避難所となっている長尾小学校で活動
  - ・ 子どもの世話・救援物資の仕分け・炊き出し
  - ・ 清掃・健康チェック・犬の散歩
  - ・ 市職員、住民代表とボランティアでミーティング

## ③ 宮塚公園お風呂サービス

2/8～2/19：12日間

- ・ 浄土真宗本派西法寺、真宗大谷大阪仏教青年会等に合流し、仮設風呂で入浴サービスを実施
  - ・ 近くの温泉から湯を運搬、入浴のための必要物資の仕分け、身体障害者用の風呂テント設置、入浴介助、夕食の準備、地域住民への広報

## ④ 西宮市ボランティアネットワーク

2/22～3/24：24日間

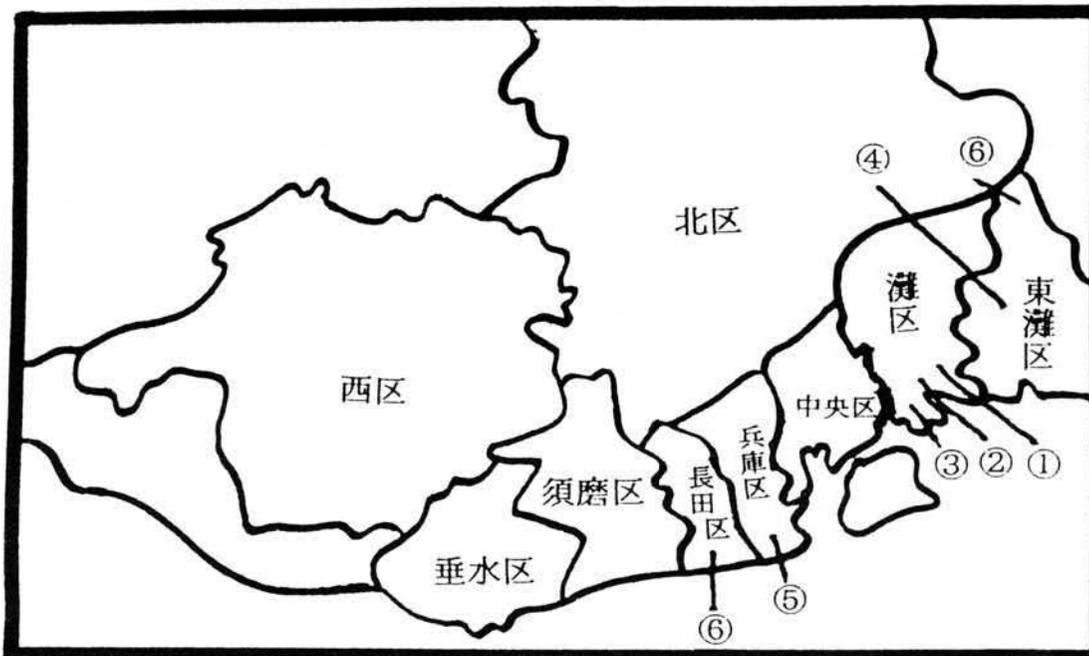
- ・ 西宮スポーツセンターに保管された救援物資（郵パック）の仕分け
- ・ 避難所となっている真砂小学校で救援物資の仕分け、搬出
- ・ 今津体育館で救援物資の仕分け、整理
- ・ 川崎製鉄倉庫で救援物資の仕分け
- ・ 西宮福祉会館で引っ越しの手伝い、住居地区別建物破損状態のファイル整理
- ・ 避難所となっている成徳小学校（神戸市灘区）で仮設住宅建設に伴うグランド内テントの移動、焚き木の薪割り、たこやきの手伝い
- ・ 福祉センター内ボランティアセンターから車を運転し、車椅子の老人や老夫婦を銭湯等へ送迎

## ⑤ 淡路島北淡町ボランティア事務局

2/25～3/31：35日間

- ・ 避難所から役場への連絡係り
- ・ 避難所となっている町民センターで老人の話し相手
- ・ 救援物資配給に伴う人員整理
- ・ 第3次分配で各地区へ救援物資の宅配
- ・ 水のでない地区へ水を運搬するなどの「おたすけ隊」に合流
- ・ 仮設住宅へ入られた方を訪問し情報交換するなどの「仮設ケア隊」に合流
- ・ 救援物資の管理、分配、バザー会場の設営
- ・ 各避難所での食事作り
- ・ 自衛隊のトラック運搬で道路などに落したガレキ拾い

# 《神戸市》



## ①灘区災害ボランティア 2/14～3/3：18回

- ・避難所となっている御影北小学校（神戸市東灘区）で活動 《現地泊》  
洗濯機設置，チラシ配布，救援物資の運搬・整理，朝食・昼食の準備・配給
- ・灘区役所内本部でボランティア受付業務
- ・地域の空き缶拾い（歩き隊）

## ②西灘小学校 3/1～3/13：13回

- ・避難所となっている西灘小学校（神戸市灘区）で活動  
炊き出し，子どもの遊び相手

## ③六甲小学校 2/15～3/11：25回

- ・避難所となっている六甲小学校（神戸市灘区）の声かけボランティア隊に合流  
被災者の方々とお話をする，炊き出し，布団乾燥，救援物資のバザー，卒業式のための校内引越し，手品ショーや人形劇などの手伝い。

## ④VOWS CAFE'

- （御影中学校校庭談話室）3/4～3/29：26回
- ・避難所となっている御影中学校（神戸市東灘区）にて、大阪仏教青年会の発案による無料喫茶店の運営  
営業時間…11:00～19:00  
メニュー…甘酒，コーヒー，紅茶，ココア，ジュース，緑茶など  
利用される被災者に飲み物をお出しし、一緒に談話する

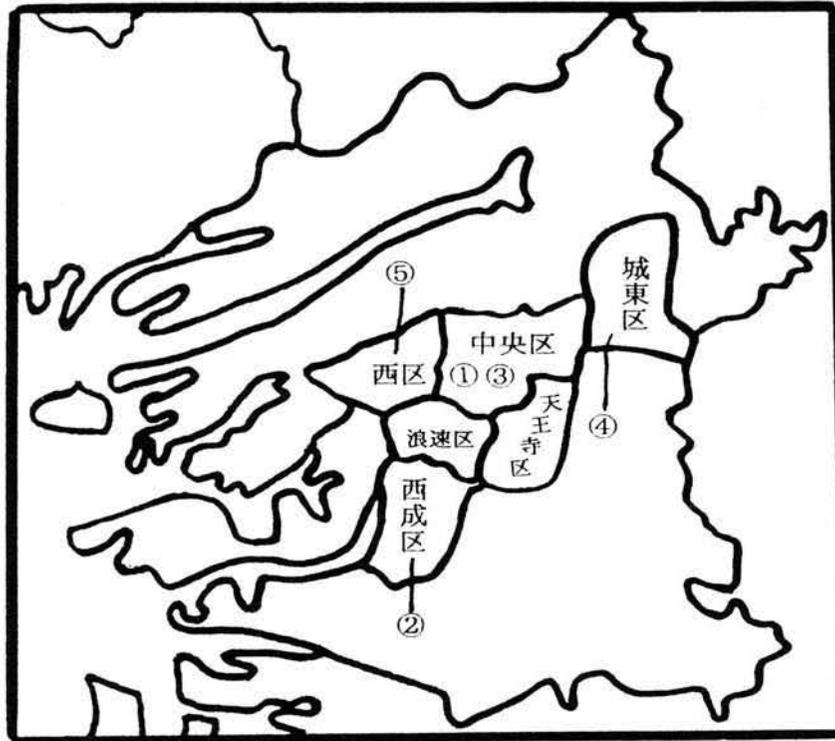
## ⑤神戸市立盲学校での炊き出し（兵庫）

- 3/7：1回（事前の打ち合せ2回）
- ・大阪ろうあ会館からの紹介で避難所となっている同校グラウンドで本学生主催の炊き出しを実施  
教頭先生との打合せにより、メニューは焼き肉とし、隣接する2つの避難所の方も誘いするため、300食分用意した
- ・当日のメニュー 焼き肉，焼き野菜，ご飯，キムチ，ゆで卵，（みそ汁…現地ボランティアによる）
- ・当日の人員 避難者…約250名，現地ボランティア…約20名（作り置き…約30食分）

## ⑥視聴覚研究部の巡回 3/18～3/20：3回

- ・神戸市立おもいけ園（神戸市長田区），神戸市立もとやま園，御影中学校（ともに神戸市東灘区）などで、紙芝居，手遊び，人形劇などを披露

# 《 大 阪 市 》



## ①大阪ろうあ会館

2/6~3/17 : 35日

- ・安否確認表の点検
- ・聴覚障害者の震災に関する新聞整理
- ・神戸ろうあハウスへの視察, 救援物資運搬・配給
- ・大阪ろうあ会館, 手話協議会他の地震対策会議や講演会の各種資料作成
- ・街頭募金活動 (3回)
- ・救援物資の仕分け, リスト作成
- ・耳の日記念大会参加
- ・手話学習

## ②西成区障害者会館

2/13~3/18 : 28日

- ・重度肢体障害を持つ女性1名の生活介助
- ・対象者の母親の話し相手
- ・ひなまつりパーティー

## ③大阪障害者センター

2/6~3/3 : 26日

- ・安否確認調査票のパソコン入力
- ・家屋状況や各種要望事項の電話確認
- ・大阪市立早川福祉会館での生活介助
- ・新年会(西宮市)で炊き出し補助
- ・すずかけ作業所(西宮市)で餅つき
- ・あぜくら作業所(尼崎市)で土のう作り, 廃品回収, 子どもの世話, 成人式の手伝い等, 多岐にわたる活動
- ・苦楽園に簡易トイレ運搬
- ・西井出児童公園, 多聞小学校, 楠中学校で炊出し
- ・マッサージ師(視覚障害者)の方の手引き
- ・入浴カーでの入浴介助
- ・武庫川幼稚園・上甲子園幼稚園で保育のボランティア

- ・神戸市須磨区から北区への引越し手伝い
- ・西宮東口での障害者を持つ家庭への水汲み
- ・センター内での募金集計や自転車の発送など多岐にわたる活動
- ・尼崎市内での在宅調査

## ④障害者支援本部

2/6~2/12 : 7日

- ・障害者解放センター, 総合教育センター(西宮市)で活動
  - ・風呂介助・食料, 水の搬入・食事作り・安否確認のピラ貼り付け・一人暮らし老人のようすを伺ったり, 市営住宅の障害者宅へ水を調達・子どもの遊び相手
  - ・炊き出し・餅つき

## ⑤H A B I E

(視覚障害者支援対策本部)

2/28~3/31 : 32日

- ・電話対応, ボランティア・第2次被災見舞金受付
- ・盲人用具の運搬
- ・視覚障害を持つ方のガイドヘルパー
- ・避難所情報の整理
- ・避難している子どもを小学校まで送迎
- ・住宅提供者の確認
- ・サービス提供のための資料作り
- ・ボランティア希望者講習会用の資料作り

# 1995年4月から

## 12月までのDVNの活動報告

4月1日	設立
------	----

今後も震災支援を続けるために、またそれ以外にもさまざまなボランティア活動を行い、他大学、団体との交流を図るためにDVN（同朋大学ボランティアネットワーク）が設立されました。

同朋大学朋儕館1階に事務活動場所を設置し、代表は同朋大学社会福祉学部3年、宮嶋智也に決定しました。

4月7日～10日	現地ボランティア
----------	----------

当初は尼崎市で仮設住宅への引っ越しの手伝いの予定でしたが、さまざまな事情により芦屋市の「応援する市民の会」でお手伝いさせていただくこととなりました。

活動は掃除や荷物運び、引っ越しの手伝い、また、同会のビラ配りなどでした。

活動した人からは「ボランティアに甘えているように思える場面も多々あった」という感想をいただきました。ボランティアの数が多かったこともあり、家族でできることまでもボランティアに頼むということがあったようです。できる限りは自分たちで助け合い、どうしてもできないことをボランティアに頼むというのが理想的なのではないでしょうか。

4月15日	ボランティア体験報告会
-------	-------------

阪神・淡路大震災のボランティアに行き、感じたことや思ったことを名古屋の人に伝えるために、そして風化し始めた震災をもう一度思い出してもらうために、同朋大学成徳館12階ホールにてボランティア体験報告会を開きました。現地でボランティア活動を行った学生4人による活動報告と、9人のパネリストをコーディネーター役の同朋大学教授がまとめる形のパネルディスカッションの2部構成で行いました。

他にも被災地の状況の変化を知ってもらうために全国各社の新聞記事を展示したり、被災地の交通復興状況を展示するなどしました。

4月29日

チャリティーバザー

名古屋からできる支援として、同朋大学中庭でチャリティーバザーを行いました。バザー商品は大学周辺にバザー品募集のビラを配り、その場でいただいたり、都合のよい日に取りに伺ったりして集めました。当日はバザーだけでなく楽しいイベントにするために、名古屋音楽大学有志による演奏や、オークションなどを行いました。

他にも名古屋造形大学・短期大学有志による子供との交流スペースの提供、各団体、企業、個人の震災支援商品の販売なども行い、その結果、収益金は100万円を越えるという、予想をはるかに上回る金額が集まりました。

この収益金の一部を各団体、企業、個人に返金し、残りは全額を以下の4団体に送らせていただきました。

- ・大阪ろうあ会館
- ・大阪障害者センター
- ・障害者救援本部
- ・がんばろう神戸

5月3日～7日

ゴールデンウィークの現地ボランティア

約1週間の休みを利用して、現地でボランティア活動を行いました。今回は1年生や名古屋音楽大学、名古屋造形大学、同短期大学の学生など、現地へ行くのは初めてというメンバーが多くいました。

活動は4月にお世話になった“応援する市民の会”の活動に参加し、芦屋市、神戸市、西宮市で行いました。しかし、遠方から短期間来るボランティアの仕事は減っており、仕事のない日もあり、「現地ボランティア＝汗水流して働く」というイメージを持っていた参加者の中には「自分はなぜ来たんだろう」と思った人もいたようです。

「せっかく来たのに、何もしないでいたら何をしに来たのかわからない」と思ったら、来てよかったと思えるように自分から動くこと、働きかけることも大切だと思うのですが。

5月14日

あしながPウォーク10 参加

あしながPウォーク10とは「あしなが育英会」主催で5月と11月に行われます。大勢で歩いて、育英会の活動を知ってもらい、寄付金を集めようというものです。

その寄付金は、今まで病気遺児の奨学金として使われていましたが、今回からは震災遺児支援も行うことになり、あしなが育英会の趣旨にDVNも賛同し、名古屋コースを10キロ歩きました。その際、Pウォーク10の名古屋会場の実行委員会より、バザーの協力要請があり、4月29日のチャリティーバザーで残った商品を使ってスタート・ゴール地点である名城公園でバザーを行いました。

収益金は25,642円。全額をあしなが育英会に寄付させていただきました。

6月6日

DVN全体会

DVNの今までの反省点に「少人数に仕事の負担がかかっている」「全体を把握している人がいない」「空いている時間に来ても仕事がない、何をしたらいいのか分からない」などの声があがり、それを改善するために全体を8つの班に分け、それぞれに班長を決め、各班のことは各班長が取りまとめて把握していく、という体制にすることに決定しました。

代表、代表補佐、会計とほかに広報班、チャリティーバザー班、震災支援班、他方面ボラ班、大祭・夏祭り班、感想文班の6つの渉内と、他大学との渉外、一般ボランティア機関との渉外の2つの渉外班に分け、DVN登録者にはそれぞれ好きな班に入ってもらい、あまり参加できない人にはイベント時に参加してもらい、ということにしました。

6月6日にはDVN登録者に集ってもらい、各班のこれからの活動を知らせるとともにDVNというものがなぜ、何のために存在して、活動しているのかをみんなに再確認してもらいました。

7月7日, 8日

同朋大学夏祭り参加

毎年行われる同朋大学の夏祭りではバザー商品の残りをを使って「50円払って腕相

撲に勝ったら好きな商品をもらえる」という、遊び感覚の企画を行いました。といっても、結局勝っても負けても商品は渡してしまいました。子供たちは結構面白がってくれていたようです。

この腕相撲の収益金は夏祭り主催の大学生協からのカンパと合わせて、大阪ろうあ会館、大阪障害者センター、障害者救援本部の3団体に送らせていただきました。同時に模擬店ではフライドポテトとおにぎり、ほうばずしを販売し、こちらの売上げはDVNの活動資金に充てることとしました。

他にも、被災地の復興を願って笹に短冊を飾ったり、阪神・淡路の震災から現在までの様子を知ってもらうために成徳館1階エントランスホールに写真パネルの展示をしました。

8月19日

チャリティーバザー（震災から学ぶボランティアネットの会主催）

「震災から学ぶボランティアネットの会」は、東海圏を中心としたネットワーク構想を実現させようと考えた人が集まって、会議を重ね、設立されました。

この会の趣旨は1つめに、阪神・淡路大震災による被災者を支援している、またはしようとしている東海圏の個人、団体がネットワークを結ぶことで生まれる利点を最大限に活用し、今後も支援を継続していくこと。2つめにこの地域が震災などに見舞われた時、このネットワークを活用して正しい情報の収集、発信に努め、救援活動を積極的に行っていこう、というもので、日本福祉大学被災者支援センターや、愛知県立大学、中京大学などの学生有志、名古屋YWCA、自立の為の道具の会などの社会人、奨学金を送る会などの高校生、その他個人を含めたこの地域の人々で構成されています。

同じ思いをもつ多くの人が集まることによってできることがあるということをも2月3月に学んだDVNも事務局となってこの会に参加しています。

このネットの会で“夏休みに被災した子供たちを招待してキャンプをしよう”という企画があがり、その資金集めの手段としてチャリティーバザーを行うことになりました。そこで4月にチャリティーバザーを行ってノウハウを得たDVNが実行委員会として、企画、運営を担当することとなり、8月19日に名古屋市中区の東別院北西用地で行いました。

バザー商品は、バザー品募集のビラを配ったり、ネットの会のメンバーに頼んで集めました。バザー開催の告知はテレビ、ラジオ新聞といったマスコミを利用し、同時に会場周辺にビラを配るといった方法も行いました。

当日はバザーの他にやきそばやかき氷などの露店を開きました。また、ステージ企

画としてミニコンサートやスイカ割り大会、オークションなどが行われ、子供連れの家族にも大変喜ばれました。バザー商品はもちろん、露店の材料や器具などのほとんどを様々な団体、個人が無償で提供して下さいました。ステージ企画の出演者もチャリティということで本当に炎天下の中、100人近くのボランティアが参加して、その結果55万円あまりの資金を得ることができました。

8月27日~29日	キャンプIN白川 (震災から学ぶボランティアネットの会)
-----------	------------------------------

ネットの会主催で被災した子供たちに夏休みの楽しい思い出を作ってもらおうと自然あふれる白川町でキャンプを行いました。このキャンプには神戸市内の養護施設や避難所の子供たち19人とスタッフ21人が参加しました。

今回は日本福祉大学被災者支援センターが実行委員会として企画運営を担当し、DVNからは数名がスタッフとして参加しました。

1日目の夜はみんなで夕食のカレーをつくり、キャンドルサービスを行い、2日目はウォークラリー、昼からは川遊び、夜はバーベキューにキャンプファイヤーにきもだめし等もして、子供たちもとても楽しそうでした。

宿泊は蘇原協会のご協力で、食材は地元の方々のご協力で無償でご協力していただきました。

今回出会った子供たちとは、今後も交流を持ち続けたいと思います。

キャンプの後、支援センターから子供たちの手紙が送られてきました。子供たちが喜んでくれたことが、スタッフにとっては最高に嬉しい出来事でした。



9月4日～10日

9月の現地ボランティア

「被災地の現状を自分の目で確かめ、今後の支援を考えよう」という目的を持って芦屋市、神戸市、西宮市で活動を行いました。

神戸市では東灘区の“東灘地域たすけあいネットワーク”にボランティア登録し、家事介助や外出介助を行いました。

芦屋市では仮設住宅で住民の話し相手や世帯調査、ビラ配り等の活動をしました。他に、生活用品の提供と、家に閉じこもりがちな人が外に出るきっかけになればということで仮設住宅でバザーを開催しました。皆さん楽しそうにたくさんの買物をして喜んでいただけたようです。この日の売上げ83,230円は震災で倒壊した神戸母子寮の再建費として送らせていただきました。

西宮市では「茶話やかパラソル」（お茶を飲みながらボランティアと仮設住民と地域住民が交流を深めることを目的とした交流会）を主催する“西宮地域助け合いネットワーク”に協力する形でバザーを行いました。

利益目的のバザーではないので、お客さんにどんどん値切ってもらい、コミュニケーションをとりながら楽しくできました。収益の約2万円はネットワークの資金にさせていただきました。

短い時間しか現地に居られない私たちにでも、様々な団体、個人と協力して現地でこのようなイベント的なこともできるのだと思いました。

遠くからできる支援の形、近くで行う支援の形、どちらも今後も必要であると感じました。

10月17日

DVN夏休みの活動報告会

DVNが夏休みに行ったチャリティバザー、キャンプIN白川、9月の現地ボランティア活動を通して、また、いろいろな人に出会って各自が思ったこと、感じたことを、そして阪神・淡路の現状をたくさんの人に知ってもらうために、報告会を開きました。しかし、講義時間内に行ったため、参加人数は教職員を含めて25名と少なく、残念でした。

活動報告の他にも、今の仮設住宅の様子を少しでもわかってもらえるように、10月10日に芦屋市で撮影した仮設住宅のビデオを放映しました。

時間の都合上、報告のみで終わってしまい、意見交換などができなかったことは残

念でしたが、参加した人は報告と感想を聞いてそれぞれに何か感じたことと思います。  
この報告会が今後の支援を考えていく材料の一つになったらいいのですが。

11月2～5日

同朋大学・名古屋音楽大学合同学園祭参加

DVNがどんな活動をしているのか、阪神・淡路大震災のその後、現地が今一体どうなっているのか、この地域で大地震が起きたらどうしたらいいのか、また、その時DVNは何をするのか、何ができるのか…。合同祭は、DVNが阪神淡路大震災から学んだ事や考えた事をまとめ、今までを振り返ってみるよい機会だと思い防災と震災支援をテーマに研究発表を行ないました。

「名古屋で災害が起こったら？」と題したコーナーでは、非常食の試食や防災グッズの展示、その他に自分たちで調べた名古屋市内の避難所を地図に表したり、地震が起きたらどうしたらいいのかなどをまとめて展示しました。

震災関連のほうでは、地震発生直後から当時までの復興状況をまとめて展示したり写真パネルの展示、モニターでは震災関連のビデオを流すなどしました。

その他、目玉として同朋大学の教室内に本物と同じ間取りで仮設住宅を再現し、仮設住宅がどんなものなのか、どういう問題点があるのかを体験して知ってもらおうと企画しました。

「忘れていませんか、大切なこと」というタイトルのもとに、被災地への長期的な支援の必要性を訴えると同時に、阪神淡路大震災は決して人事ではなく、いつ自分の身に起きてもおかしくないということを知ってもらえたら、と思いました。4日間で延べ500人もの人が訪れ、仮設住宅を体験されました。

11月11日, 12日

福祉フェスティバルあいち参加(ネットの会)

名古屋市に仮設住宅を建てて実際どんなものかという点が不便かを体験してもらおうということで、栄のセントラルパークで開催された福祉フェスティバルあいちにネットの会が参加、本物の仮設住宅を建てるということになり、DVNもお手伝いさせてもらいました。

6畳と4畳半の部屋に、キッチンとユニットバスというつくりのプレハブ仮設住宅に各団体の活動報告、活動写真、機関紙、新聞記事のほか、仮設住宅の問題点や兵庫県の仮設住宅のデータを展示しました。

2日間で約1,000人の人が見学し、仮設住宅を体験しました。特に11日は寒さが厳しかったので、訪れた人たちも「これは寒いな」と、その寒さを実感されたようでした。本物の仮設住宅を建てたということで話題にもなり、名古屋の人々に忘れていた震災を思い出してもらえたことでしょう。

11月12日	あしながPウォーク10 参加
--------	----------------

5月と同様に、名古屋コース10キロを歩きました。名古屋コースには同じ日に開催された福祉フェスティバルあいち（ネットの会参加）の会場もコースに入れていただき、たくさんの人に仮設住宅を見てもらうことができました。そして、スタート・ゴール地点となった白川公園では法兰克福とジュースを売り、そこでの売上金15,094円をこの企画主催側の「あしなが育英会」に寄付させていただきました。ほかに、ゴール地点では仮設支援連絡会で行っている黄色いハンカチ運動（仮設の住民が朝起きたらこの黄色いハンカチを軒下に吊し、夜になったら取り込むことで、その人の安否を確認する）の協力も呼びかけ、同時に黄色い布を配りました。黄色い布は端を縫ってハンガーに通して、各人が仮設支援連絡会に送って下さるようお願いしました。その後、仮設支援連絡会のほうには何枚も黄色いハンカチが送られてきたそうです。

12月3日	クリスマス会募金（ネットの会）
-------	-----------------

8月のキャンプに参加した子供たちに楽しいクリスマスを過ごしてもらおうと、クリスマス会を計画し、その資金集めの手段として名古屋駅で募金活動を行いました。5時間で39,322円を集め、そのお金で子供たちへのプレゼントなどを買いました。残念ながら12月9日に予定していたクリスマス会は様々な事情により2月に延期となってしまいましたが、子供たちにはクリスマスにプレゼントと手作りクッキーを送らせていただきました。

12月13日～17日

阪神・淡路地区越冬支援募金

震災から2回目の冬を被災地の人々はどう過ごすのか、そんなことを思っている時現地のボランティア団体から暖房器具などが不足しているという情報を聞き、“この冬を少しでも暖かく過ごしてもらおう”と募金活動を行いました。

12月13日～15日は同朋学園内で、12月16、17日は名古屋駅で行い、5日間の総額は137,074円になりました。このお金は、「西宮地域助け合いネットワーク」を通じて、西宮市の甲子園九番町仮設住宅の方たちに、電気アンカ、電気毛布、手袋、こたつを買って、12月27日に直接お届けしました。住民の皆さんもとても喜んで下さり、寒い中頑張って本当によかったとその笑顔を見ながら思いました。



「ボランティア」この言葉は、今まで自分には何の関係もないものだった。

1995年1月17日午前5時46分、淡路島北部を震源とするマグニチュード7.2の直下型大地震が発生した。この阪神・淡路大震災で多くの人々が被災した。その多くの被災者の中の一人として、また北淡町でボランティアをする一人として考えていきたい。

生涯忘れることができない出来事だった。その時間、僕はなぜかいつもより早く目が覚めた。少し小さな揺れがあり、次の瞬間、大きな音そして揺れがあった。周りの家々が破壊され言葉じゃ表せない状態だった。

そして半月くらい経って、仮設住宅ができ始めた。確実に復興していった。淡路農高では、全校生徒が千羽鶴を何組か作ったりしていた。ある日、校内でボランティア組織をつくって人を集めていた。最初僕は「ただなんとなく」といった考えが強かった。そして物資担当のボランティアをやり始めて、周りにいる同じ学校の人達を見て失望した。昼休みが終わると、もうほとんどいなくなっていた。「一体何人だろうか？ 自分も同じような気持ちだったのだろうか？ これでいいのか、いやいやいいことはない。もっと地元の学生などが中心となり、ボランティアを積極的にやらないでどうする！」といった気持ちが、自分の中で広がり、自分自身にそして淡農生に対して憤りが大きくふくれ上がっていった。

春休みに入り全国各地から多くの学生の人々がボランティアにやってきた。それに比べ、淡農生はほとんど何もやっていない者が多く、もう自分でも抑えられないほど怒りが頂点に達しようとしていた。思い悩んで一つの結論にたどり着いた。それは、自分自身で個人でボランティアを始めるといったことだ。次の日から、毎日頑張っただけ長くそして多くの仕事をしようとして一所懸命に働いた。春休みにやりたかったことの多くをすっ飛ばしてボランティアをやった。そのかわり、たくさんのすばらしい仲間ができた。周りの人は、年齢・職業・その他モロモロあらゆる面で違った人達だった。でも、北淡町の復興という一つの大きな目標に向かって一丸となってみんなが頑張っていた。僕は「この人達の姿を農高の奴らに見せてやりたいな」と思った。

徳島から来ていたある“おっちゃん”が口癖のように言っていたことを思い出す。「今の若い者も捨てたもんじゃない。全国各地からこんなにたくさんの学生

ボランティアが集まってくるとは夢にも思わなかった。これはすごい力だよ。」この言葉を思い出すたびに、僕は農高生がとった行動が悔しくて、そして恥ずかしく思えた。

ボランティアを始め、日を増すごとに気軽に話したりする仲間が増えていった。「自分が悩んで選択したことは、けっして間違っていなかった。正しかったのだ」と強く思い、そして大きな自信となっていた。周りの仲間の人達は、みんな個性的で面白かった。そして、仕事をやる時はみんな一所懸命やる人達だった。毎日が充実していた日々だった。休日にこれだけ充実した時は今までにないと思えるほど充実していた。そして春休みが終わった。

そして、この夏のイベントのTV放送で、ある一人の人がインタビューに答えていた言葉がすごく印象的だった。内容は「ボランティアをやっていて辛かったことは？」という質問だった。「ないです。ボランティアは家族みたいにやって、すごくいい雰囲気でしたから」と答えていたのが、すごく印象的で、そしてうれしかった。

最後に、ボランティアをやっていて、一つの震災で失ったものはたくさんあるが、ウジウジしてないで、できるだけ元通りになろうと思う心が大事なのでは、そして元通りではなく、それ以上の素晴らしいものを作り上げていくといった気持ちがこれからは必要なのでは、という考えが生まれた。これは一被災者としての意見だ！ 自分の意志を大きく持って生きていきたいです。



「大震災の後、ボランティアをしててん」と高校時代の友達の集まりで話した。ホウと一同少し感心したように、私を見る。別にそれでいい気になっているわけではないが。

「で、神戸はどんな様子やった？」と、一人が聞いた。

「神戸に行ったんちゃうねん」

「ほな、どこに行ったん？」

「淡路島の北淡町」

「あっそうか、淡路島も被災地やったな」

「そうやで、震源地やんか」

「テレビであんまり報道せえへんから、わからへんかったわ」

淡路島北淡町。阪神・淡路大震災の被災地の中で、最も見落とされているのではないかと思われるこの島で、2月半ばから3月末日まで『北淡町ボランティア』として被災者の支援活動をした。

北淡町ボランティアは、ボランティアトップリーダーを頂点に末端のセクションに至るまで完全に組織化されていた。組織を大きく分類すると救援物資関係、避難所関係、仮設住宅関係となる。私の所属部署は、救援物資関係と避難所関係のほぼ中間の部署『役場前食品配送』というセクションだった。人員体制は、ボランティアと毎日の献立をたてる役場女子職員数名による半官半民体制だった。ここの仕事内容は、北淡町内にあるすべての避難所に救援物資で送られてきた食品をより分けて、配送する仕事である。

この部署のリーダーになった直後「避難所での毎日の食生活の中で、避難者にとって本当に必要なものはなんだろう」と、ふと思った。

役場の前のテントの中で、毎日毎日食品をより分けていても、避難者のニーズなど分かるはずもなかった。一方的に私達が決めた食品を配送しているだけ（見方を変えれば、押しつけているだけ）で、そこには避難者のニーズなど介在していなかった。しかも配送する食品の品物はほとんどが限定されており、パターン化していた。

「1回、避難所に何か必要か調査しに行こか」と何人かのスタッフに呼びかけて全避難所をまわってみた。

ニーズ調査の項目はある程度決めておいた。今何が必要で、何が余っているのか、今まで配送した食品で評判がよかったものは何か……等々。

避難所では、台所担当の避難者に直接ヒアリングをした。不足している物の筆頭に上がったのが肉、魚類だった。だが、こればかりは救援物資で来ないので、どうしようもない。また、物によっては大量に余っていて、腐りかけた野菜が段ボール箱に詰められたま

まになっている。

実際に避難所を回ってみると、各避難所ごとに格差があるのが分かってきた。この頃になると、避難所のほとんどが自炊を始めており、どうしても必要な物は自分達でお金を出しあって買っていた。また、パターン化している食材の調理方法に変化をつけるために、調味料さえあればもっと工夫できる、等の意見があった。

役場の前で物資を仕分けして、配送しているだけでは絶対に分からない避難者の現状が見えてきた。

お金を出しあって買っている食品の中には、救援物資の中にある物もあった。救援物資としてどのような物資が到着しているのかをしっかりと避難者に伝えることも大切だと感じさらにこのセクションに関しては、ボランティアと避難所のつながりがまだまだ薄いなぁとも思った。さてさて、どうしたものか……。

私達の仕事は食品を避難所ごとに仕分けする仕事だ。そして今までは、配送した食品は避難所の台所に置いてくるだけだった。

この調査後は、救援物資に何が到着しているのかを一覧にしたリストをコピーして、台所担当の人に手渡して、食品を持って行ったときに「何か必要な物はないですか。」と、常に一声かけるようにした。

こうして避難者の声が直接聞けるようになり、本当に必要な物を渡せるようになった。少しの工夫でボランティアとして避難者に対して『いい仕事』が出来るようになった。そして、避難所の人から「兄ちゃんらのご飯持ってきてくれるようになってから、よくなったわ。ありがとう」と言われた時、その場に居合わせた私達はうれしく、顔のデッサンが崩れるくらい笑ってしまった。

ニーズは待っていても出てこない。ボランティアとして指示を待っているだけではなく自分から積極的に動き出さないといけないこともあると感じた。ただ、こういうことをしだすと今度は弊害も出てくる。避難者が多少無理な注文をしだすことがあるのだ。私達の仕事はあくまで『支援活動』だ。避難者が自分で出来ることは自分で、あるいは隣近所で助けあってしてもらうことが最善ではないか。

ボランティアとして「これをするとやりすぎだな」と思われることは、毅然と断ることも大切だと思う。

そして、「どこでボランティア活動とやりすぎの線引きをするのか？」ということ常を常に自問しながら活動しなくてはならないと考える。

未曾有の被害をもたらした阪神・淡路大震災が起きた1月17日から7カ月余りの月日が流れた。3ヶ月ぶりに来た神戸の街並みも2月に神戸を訪れ、自転車である小学校の避難所へ行った時と比べ、着実に復興へ一歩一歩前進しているように思われた。しかし、依然として、困難な多くの問題を抱えている住民の人々が大勢いる。そのような話を耳にする度に、「自分にいったい何が出来るだろうか。」と思い、何も出来ない自分を齒がゆく思う。このような思いを持っている人は、決して少なくないのではないのだろうか。私達は本当に小さなことしか出来なかったが、1月以来あの地震のあった神戸、西宮、淡路島等で、支援活動を行ってきた。私達はそこで何を感じとったのだろうか。避難所で出会ったおばあちゃんとの出会いは、今でも私にとって心の支えになっている。その他にも様々な人との出会いが私に大きく影響を与えているような気がする。心をこめて人に逢う、出会いをいつも大切に、自分をいつも大切に。これからの私の人生の旅路でもこんな気持ちを大切に生きていきたいと感じた。

筆者自身も、西宮市内のH小学校に3月初旬ボランティアとして、現地で活動に従事した。この時期の避難所は一進一退を繰り返す状況で、住民自治の確立が課題とされていた時期であった。一人暮らしのお年寄り、痴呆症のおじいちゃんを心をこめて介護するおばあちゃん、その他様々な生活上の問題を抱えている方々、日常の生活を奪われてしまった子ども達、全国から駆けつけたボランティア、本当に様々な人々と出会った。その中でも特に印象に残ったのは、身寄りのない一人暮らしのおばあさんだった。筆者は避難所において、物資の管理が主な仕事であった。その仕事の合間をぬって、一人暮らしのお年寄りの健康チェックの仕事をしていた。その際に、風邪をひいて熱を出しているおばあちゃんとお会った。そのおばあちゃんと1時間くらい話した後、物資管理の仕事に戻った。翌日筆者も風邪をひいてしまいダウン。一晩休みをもらった。その翌朝、朝食の配膳をしているとき、風邪をひいていたおばあちゃんが「風邪をひいたんだって、大丈夫？あんまり無理しないでね。」と言ってくださったのである。この時、「ボランティアはしてあげるのではなく、住民の方と支え合う手段のひとつなのではないだろうか。実は、本当に支えられていたのは、自分の方ではなかったのではないだろうか。」と感じたのである。心理学者の河合隼雄は、「自立とは、適度に依存し合う人間関係のことを言う。独りで全てのことを行い、他人に全く依存できない状況は孤立である」と定義している。ボランティア活動に従事し対人援助を行うということは、自立へのひとつの方法なのではないかと考えた。

「お布施」というのがある。ここでいう「お布施」は、お金だけのことを指すのではな

い。「お布施」というのは、相手に無く自分にあるモノを分けて共有することで、お互いによかったよかったと感謝しあい、喜びあうことである。ここで強調しておきたいことは分けた方も分けられた方も共に感謝しあうことが大切であるということである。何故か。分ける人、分けるモノ、そしてそれを受けてくれる人が存在しなければ、「布施」というのは存在しないからである。私達は一見、分ける人と分けるモノがあれば「布施」が成立するように思っている。しかし、受けてくれる人が「せっかくだが要らない」と否定すればその行為は成立しない。ボランティア活動や社会福祉の仕事に従事している時、思うように「結果」が出なかつたりすると、「あんなに世話してやったのに……」とついつい思ってしまう時もあるだろう。一方、援助を受けた方も「少しぐらい世話したからといって恩を着せるならしてくれない方がいい」と思うこともあるだろう。しかし、だからといって愚痴が出ないように仕事の量を減らすべきだとは思わない。

筆者は、大相撲が好きで、特に水戸泉が大好きだ。取り組みの前に気合いを入れ、塩をいっぱい手にし、土俵にまく姿は気持ちいい。大相撲のテレビ中継でよく解説者が「今の取り組みは力を十分に出しきっていない。負けてもいいから自分の力を出しきった相撲は見てて気持ちがいい」などと言っているのを耳にする。人間と人間とのつながりの中で、本気でぶつかっていくことにより、それぞれの人生（いのち）が充実していくのではないだろうか。

筆者は、大学で社会福祉を学び、現在、名古屋市内の養護学校で学習指導のアルバイトをしながら大学に通っている。お互いに支え合いながら生きていくというこの考え方は、筆者のように社会福祉を学ぶ者、そしてそれを実践していく者にとって常に心にとめておかなければならないように感じている。お互いの存在をしっかりと受け止め、お互いが向き合い自分自身を表現していくこと。そして、そのように「対話」していく中で、人間と人間との共感が生まれる、そのように思われた。その「対話」を表現するためには自分自身の存在を深く見詰め、自分自身を知り、理解しなければならない。しかし、自分自身のことというのは、灯台もと暗しではないが、理解しているようで案外理解できていないものだ。

ここで、一例を挙げよう。他人の行動を見ていると、その人の特徴ある仕草や癖などが分かる。しかし、その本人は言われるまで（まるで）気付かない。このような事はどのような人の周りでもあることなのではないだろうか？

筆者もアルバイト先の養護施設で、子どもに「〇〇ちゃん、いつもちょろちょろしているね。」と話した。すると、その子どもが「じゃあ私先生に似たんだ。」と言った。この子が言うには、私がいつもちょこまかちょこまか歩き回っていて落ちつきがないというのである。私は思わず苦笑いしてしまった。このようなことは、何気ない日常生活の中に転がっているのではないだろうか。人と「対話」する時に道具となるのは自分自身である。

どんなに人との接し方の“HOW TO”を獲得してみても、そこで獲得したものは、自分自身を知り、初めて生かせるのではないだろうか。そのような意味において、筆者にとってのボランティアとは、「自分探しへの旅立ち」だったのではないだろうかと思うのである。避難所の活動において、ボランティアとしての経験が豊富な人もそうでない人もどちらも常に自分にとっての活動の理念、換言すれば、なぜ自分自身がボランティアをしているのか、又はしたいと思っているのかということ深く考え、自分自身で真実を見つめて、判断し、様々な人々と対話していくことが重要であると感じたのである。なぜならボランティア同士、ボランティアと被災された方、そして、被災された方同士が話すことを通してそれぞれが「自分探し」をしていく中で、被災後の社会が創造されていくと思われるからだ。

最後に、私の大好きな詩を紹介させていただき、終わりにしたいと思う。

トマトとメロン

相田 みつお

トマトにねえ いくら肥料をやったってさ メロンにはならねんだなあ  
トマトとねメロンをね いくら比べたって しょうがねえんだな  
トマトよりメロンのほうが高級だ なんて思っているのは 人間だけだね  
それもね欲の深い人間だけだな トマトもね メロンもね 当事者同士は  
比べも競争もしてねえんだな トマトはトマトのいのちを精一杯生きているだけ  
メロンはメロンのいのちをいっぱい生きているだけ トマトもメロンもそれぞれに  
自分のいのちを 100点満点に生きているんだよ トマトとメロンをね  
2つ並べて比べたり競争をさせたりしているのは そろばん片手の人間だけ  
当事者にしてみれば いいめいわくのこと

「メロンになれメロンになれかっこのいいメロンになれ！！

金のいっぱいできるメロンになれ！！」と尻ひっぱたかれて  
ノイローゼになったり やけのやんばちで暴れたりしているトマトが  
いっぱいいるんじゃないかなあ。

(1995年 8月 神戸にて)

死者、6千人以上を出した阪神・淡路大震災から1年が経とうとしている。私はこの1年の間に、ボランティア観についてこれほど深く考えさせられたことはなく、同時にこの出来事を通じて知り合った人達との出会いが、どれほど自分のプラスになったか分からない。

4月に同朋大学に入学し、5月のG. W. に「同朋大学ボランティアネットワーク (DVN)」として初めて被災地である阪神地区へ足を踏み入れた。その頃は被災地の情報も少なく、2、3月の神戸の姿が強烈に頭に残っていた私は、その感覚を持ちながら、活動場所へ向かった。しかし、現実は違っていたのである。

私が派遣された活動場所は、「被災者に憩いの場所を」ということで設けられた無味半喫茶店だった。2日間にわたり活動したが、そこで感じたことは、「私はここにいてもいなくても同じなのではないだろうか。」ということだった。そこでの仕事内容も来客の皆さんで補える程度のものであったし、話を交わそうとしても、被災者の方々同士でなければ分からないような会話にはついていけず、どうしても部外者という感覚がつきまとっていた。午後、時間が余ってしまい、芦屋の方を視察した。震災直後と比べれば、壊れた家は片づけられ、道路もきれいになっていた。しかし、少し奥のほうに足を向ければ、そこには崩れたままのマンションや家々が、まだまだ無残に並んでいた。それを見て「いったい何のために私はここに来たのだろうか。これじゃ、ただの観光と変わらない。」という思いがずっと頭の中を駆けめぐっていた。私はこの時、この活動で自分の力が活かされた、という感覚は全く無かった。ただ「どうしてもっと被災者の方々の生活を直接助けられる活動をさせてくれないだろうか？探してくれないだろうか？」という、DVNに対しての反発が大きくなるばかりであった。しかし、名古屋に戻り、先輩の方々にこの思いをぶつけたりして何度か話し合ったところ、私の中にひとつの考えが見えてきた。

ボランティアというのは、体を動かすことだけを言うのではない。体を動かせば、自分は『やったつもり』になれる。しかし、それだけで満足してしまい、それによって相手のニーズに本当に答えられているのか、というところまで考えるべきなのに、私はそこまで至ってはいなかったのだ。もちろん、介護などの仕事は体を動かさなければできないわけだから、それを否定しているのでは決してなく、私の今までのボランティア観念「ボランティア＝自分の体を動かしながら直接相手に触れる」ということが、必ずしもそうではないのだと気がつけたことが、とても嬉しかった。

2、3月の先輩方の活動の中で、直接被災者に接する事はなかったが目立たぬところで確かに被災者の生活を支えていた人達がいる。直接目にする機会の少ない被災者を相手に

自分の仕事もまた、直接目に見えて相手の役にたっているか分からない不安の中で、彼らも悩み、苦しんだと聞いた。しかし私は、これらの人達こそが、震災から1年経った今でも変わらない気持ちで阪神・淡路大震災を見つめているということを知っている。震災直後の惨劇を目の当たりにし、そこで悩み、苦しみ、考えたからこそ、長期にわたる支援の必要性を感じ取り、今も活動を続けているのだと思う。このような先輩達に囲まれて私も4月から活動を続けている。先輩達と同じように、G. W. の時のような経験をする機会がなかったら、私は今も間違った観念に縛られながらボランティア活動をしていたかも知れない。

阪神・淡路地区は、着々と復興に向かってはいるものの、経済面、生活面での問題は、まだまだ解決されておらず、引き続き支援を必要としている。その中で、学生である私達に出来ることはほとんど残されていないのかもしれないが、私はニーズのある限り何らかの形で支援活動を続けていこう。なぜなら、特に地震国と呼ばれる日本に住む誰もが被災の可能性を持っていて、ほんの一瞬で、これほどの被害を出した大災害を他人事として忘れ去ってしまうことは私にはどうしても出来ないからだ。私達は、平凡な生活の中で人は1人では生きていけないということを忘れがちなのである。

震災から1年、震災の記憶が風化する中で誰もが出来ることは、現実に大震災が起こり今だに心に傷を負いながらも、一生懸命に生きようとしている多くの被災者が存在しているということを、いつも忘れないでいることだと思う。



私の主な活動場所は大阪ろうあ会館と西成障害者会館で、神戸の焼け焦げた街の中を一日中歩き回るといようなハードな活動はありませんでしたが、いろんなことを感じた2週間でした。その中で今回は、大阪ろうあ会館で気づかされたことを報告したいと思います。

意気込んで参加したボランティアでしたが、ろうあ会館での私の仕事は、全国から送られてくる救援物資の仕分けや、ろうあ者の安否確認の資料を掲示するという単純作業でした。時にはおやつが出たりして終始和やかである作業に、「被災地は大変なのに、私はこんな所にいていいのか。何か役に立っているだろうか。」と、焦りといら立ちで無口になっていきました。そんな私に気がついたのか、先輩や職員の方が「神戸のろうあ会館そのものが被災してしまったので、大阪ろうあ会館が対策本部になっているんだよ。休日返上で仕事をしているが、物資の仕分けや細かい作業までは手がまわらない。あなたがそれらの作業をしてくれるから仕事がスムーズにっているんだよ。」と言ってくれました。相手に直接行う活動がボランティアだと勘違いしていることに気づきました。震災ボランティアと言うと、被災地に入って炊き出しをしたり、倒壊家屋の片付けを手伝ったりという直接被災者に触れながらするものだと思い込んでいたのです。

なぜそう思い込んでしまったのか、それは直接行うボランティアの方が目立つからではないかと思いました。例えば、食材を提供してくれたり、また食材を提供してくれる人や調理道具を探してきてくれた人達がいる、やっと炊き出しが出来るのに、被災者からの反応が返ってくるのは、その場で炊き出しをした人にだけだからです。何かすごいことをしようとも、出来るとも思って震災ボランティアに参加した訳ではなかったはずなのに、結局は評価されたいという気持ちが大きくなっていったんだと、恥ずかしくなっていました。

何かしたことに対する人々の反応や評価も大事だけれども、その何かをするまでにどれだけの人の努力があったかを忘れてはいけないし、何かが実現するまでに自分はどれだけ努力出来るかということが大切なんですね。その後、私は西成障害者会館に避難してきた脳性麻痺の女性の介助に行くことになったので、ろうあ会館での活動はほとんど出来ませんでしたが、ここで気づかされた思いを忘れずにこれからもいろんなことに頑張りたいと思いました。

私の活動する西宮・地域たすけあいネットワークは、東灘・地域助け合いネットワークの協力を得てできた自立グループです。ボランティア活動の根付きにくい、また報道されていませんが、仮設住宅も多い西宮で何かをしたいというメンバーが集まりました。メンバーの初顔合わせが8月初めですから、まだほんの生まれたてであり、地域が明るくなるためにこの小さなグループで何ができるかと模索中です。

現在までは、行政の手の届きにくい、小規模の仮設住宅への訪問活動と、そこでのお茶会「茶話やかパラソル」を開くなど、いわば移動集会所づくりの活動を行ってきました。被災された方々の生活に、明るい刺激となり、また何よりお互いに心の通うつながりを持っていただけたら、という気持ちで頑張っています。

私達の第1回の「茶話やかパラソル」は9月9日、緑豊かな春風児童公園にある仮設住宅で開かれました。お年寄りの方が多いのですが、特にご近所付き合いはされていないようでした。当日はDVNの皆さんがバザーで応援に来て下さったり、静岡の女性が楽しい手品をして下さったりと、多くの温かい協力を得て、笑顔あふれる素敵なお茶会となりました。しかし、和やかな場ができた何よりの要因は、それを求められる住民の方々のお気持ちだったと思います。特に、住宅の建つ公園内を毎日掃除していらっしゃる高齢のMさんは、パラソル時に色々気づかって下さり、その後の訪問活動の際もご近所に声をかけて下さいます。そしてついに、後日訪問が次回のお茶会に向けての、住民の方々同士の話し合いの場という形を取るに至りました。皆さんが顔なじみという人と人とのつながりが芽生えつつあるのです。私達はその自発的な住民の方々のコミュニティづくりをただサポートする立場であろうと考えています。

私達のグループには、ホームヘルパーとして働いたり、緊急時の要請に答えるといった個々人の生活支援をする力はありません。ただ仮設住宅という仮の共同体に生活するお年寄りや、一人住まいの方々の淋しさ、不安をなくせたら、と考えています。人と人との交流の橋渡しもその小さな一環です。それはごくささやかなことですが、生活者同士の人間関係こそ、もしもの時に力を発揮するのではないかと思うのです。

私自身が、震災後の土地でボランティアを始めようと決心したのは、震災から半年ほど日が過ぎてからのことでした。TVの報道などで取り上げられなくなっていく中、近くに住んでいながら、あの出来事がどんどん他人事となっていくようで怖かったからです。しかし、今はすこし違います。被災の事実は決して忘れてはいけない、ずっと残っていく傷であることは確かです。ただ、そうした悲しい過去ばかりに目を向けるのではなく、どうしたら今の状態からよりよい生活が目指せるのか、楽しく、明るいことを一緒に考えまし

よう、という気持ちで、私個人はいます。それが、食料がない、寝るところがないといった直後の状況が落ちついてきた今、これからのスタンスだと思います。

芦屋・西宮のバザーに参加して

同朋大学 社会福祉学部2年

金澤 浩子

私は9月に生まれて初めて阪神地区へ行きました。何もかもが初体験で、ドキドキしました。

私は、西宮と芦屋の仮設住宅でのバザーに参加しました。商品の値段は目安だけ決めていたので、お客さんと交渉するのが面白かったです。バスタオルやシーツ、コーヒーセット、お茶碗などの要望が高かったようでした。お客さんには、自分の気に入ったものを安く買えると好評で、何度も買いにきてくださった方もいました。沢山の方に喜んでいただけたので嬉しかったです。

芦屋のバザーでは、井原静江さんという素敵なおばあちゃんに出会いました。井原さんは80歳を越えているようには見えないぐらい若々しくて元気で、かわいいという言葉がぴったりでした。井原さんは、「夢を忘れずにロマンを追い求めていれば毎日を楽しく、前を向いて生きてゆける。」と話して下さいました。夢やロマンなんて、と私達は現実ばかりを見て生きようとするけれど、何か目標と言えるものを持って生きることは大切な事だと思いました。私はまだ、生きる目標を持っていないので、これからいろいろなものに挑戦しながら見つけていこうと思いました。

西宮の春風公園のバザーは、前日の芦屋に比べて規模が小さいものでした。私は、ヨーヨー釣りの店番をしていました。遊びに来てくれる子ども達はみんなとても元気で、相手をする私達のほうが振り回されっぱなしでした。バザーには、仮設のお年寄りや、周りの団地の方も来て下さいました。バザー用品を片づけている時、一緒に遊んでいた男の子が、さっきまでの元気な調子とは違って「もう一生こうへんの？」と、私に聞いてきました。私は「機会があったらまた来るよ。」と答えました。今だに何故あの子が、「一生」という言葉を使ったのか、私には分かりません。ただ私達と一緒に遊んだことが、あの子ども達にとって楽しい思い出になってくれたら嬉しいと思います。

両方のバザーに参加して、被災者の方々が毎日を生懸命に生きているのを見て、私はすごく反省させられました。また、ボランティアについても考えさせられました。

9日の夜のミーティングの時に、ボランティアをする方はもっと肩の力を抜いて、楽しんでボランティアをしたらいのではないかという意見が出ました。それまでの私は、ボ

ランティアという使命感というか、やらなければならないというか、それしか見えていなくて周りや自分を見る余裕がなかったように思います。力が入りすぎて顔のこわばったボランティアがボランティアをしても、相手には心が伝わらないと思います。ボランティアをする方に楽しむ心があれば、その心が相手に伝わって、一緒に頑張ろうという気持ちも生まれてくると思います。そのことに気づいたことが、私にとってとても大きなことでした。

こんなことを言うと、怒られてしまうかも知れませんが、私は今回のボランティアに参加して、いろいろな人に出会えたし、いろいろと考えさせられたりして自分のためになったし、嬉しかったです。今回感じたことを大切にして、いろいろなことに挑戦していきたいと思います。

大震災のボランティアで感じたこと

同朋大学 社会福祉学部

2年 河合 琴乃

「阪神・淡路大震災」から7カ月が過ぎた。私は2週間ボランティアに行き、多くの事を学び、多くの人達と出会った。あの出来事は私にとって一生忘れられない出来事となった。そして全ての人々も忘れてはならないことである。

私は人間という生き物は、お互いが助け合わなければ生きてゆけないという事をこの出来事で知った。全く見ず知らずの人達が「大震災」という出来事で知り合い、「復興」というひとつの目標に向かって助け合ってゆく。自然というとてつもなく大きなものは、このちっぽけな私達人間どもに何か伝えたかったのかもしれない。私達はあまりにも平和に無責任に生きてきた。

1日も早く被災地が元通りになって欲しい。そしてもっともっと人間味あふれるすばらしい所になってほしい。

今でも避難所生活の人はたくさんいる。家に帰りたくても帰れない。地震の恐怖、必要に迫られた共同生活、それが7カ月経った今でもまだ続いているのだ。きっと心身共に疲れ切っている。これからは「心のケア」というものが大切になってくるだろう。

私達が被災者の方にできる事は限られている。しかし、全ての人が、誰もが彼らに出来ることがある。それは今でも辛い日々を送っている人が大勢いる、元の場所に1日でも早く戻るように頑張っている人が大勢いるということはずっと忘れないでいることだ。7カ月も経つとあの出来事は徐々に過去のことになりつつある。しかし、まだ終わってはいない。まだまだ続く。私達は絶対に忘れてはならない。

ろうあ会館でたくさんのお話を学んだ

まず自分の名前

手話でもインパクトを与えたい

「おに」は単語で表さないで、指文字で表そう、一応女の子なんだから、とちょっと年配の職員さんから言われた（もちろん手話で）

早く活動したいのに……と思いながらケラケラ笑っていた

そして、一週間近く通ってやっとわかったこと

ボランティアには、前線に立って動くことだけが必要とされているのではなく、今という時間、自分に何ができるのか、

例えば、壊れた家屋も、溶けてしまった道路も全く見えないここで

私（たち）に何ができたか――

物資の細かい仕分けや運搬視察

大事な書類や会議の内容のワープロ入力、テープ起こし

事務所に入ってから電話対応の補助

募金活動の準備

聴覚障害者に関する各新聞の切り抜き

私自身が携わらなかった内容も含め、たくさんあったのである

中でも一番真剣になったのは、ファックスに関係したお手伝いをしていたとき

何より震災が起きた当初は、被災地の聴覚障害者のみなさんにとって

情報を得るため、頼りにできたのは唯一、この会館であった

そのため、手話以外の会話の手段であるファックスからはその人の心が見えた

震災当日から送られてきたそれらは、いくつもの段ボール箱に押し込まれていた

その膨大な紙を日付、時間順に並べ、表にするだけで1日が終わることもあった

また、身元安否の確認であれば、相手に返事を出したり、こちらが聞いたり

関西地区各拠点に一時間以上かけて、情報を送り続けたり

私たちが送る情報ひとつで相手を笑顔にさせたり、悲しませたりする

知らない人なのに、何だか身近に感じてしまう時間であった

ろうあ会館の職員さんたちは

私たちがどんなに時間をかけたり、失敗したりしても嫌な顔ひとつ見せなかった

いつでも待ち続け、笑っててくれる

非常事態という状況は、空気に溢れているのに、お茶の時間も必ず取る  
いつでも心に余裕を作るようにしよう……見ててそう思った  
なかなか実行できないけど、本当に難しいけど  
だんだんお手伝いは減ってきた  
良いことだと思う反面  
ここでの活動が終りに近づいていることを感じ、寂しくなってきた  
でも、次に別の何かをしよう——  
また来ますねって、この会館でのお手伝いは終わり

それからは、淡路島、灘や東灘区へ行ったり  
ろうあ会館に来るまでに想像していたお手伝いをした  
そしてまた、色々な人と出会った

阪神淡路地区へ行って  
本当にたくさんの人と出会い、学んだ  
大学内ではきっとすれ違うだけであつたらう人とも……  
授業では学べないことばかり、自分にとって非常にプラスになることばかり  
そして、その人たちと今でもつながっていられるのは  
とても幸せなことだと思う



私は名古屋市の保育園で保母として働いています。現在は25歳、主だったボランティアの経験はありません。

保母として働き、市職員として組合活動に携わりながらアマチュアの劇団をやり、いろいろな場所に出向き、いろいろな人と会い、いろいろなことを教えてもらっている毎日です。

今回被災地に行くことが出来たのも、そんな日常の出会いのおかげだと思っています。神戸に行ったのはこれが初めてでした。夜景が美しいとか、お洒落な街であるとかよく聞いていましたが、私が見た神戸とは程遠く、大切なものを一瞬のうちに失った人達の失望と、それ以上に生きるパワーを感じる「被災地」神戸でした。

被害を被った地でのボランティア、また障害者や高齢者を対象としたボランティア、まだまだあるのでしょうか、「ボランティア」という言葉あるいは活動に対して、私は非常に慎重になってしまいます。自分は当の本人ではないんだ、という思いがまず先にあり、いくら誠心誠意を尽くしても、その距離をうめることはできない、結局は「してあげる」「してもらおう」の関係しかつくり得ないのではという危惧を感じていました。

被災地に入る時も、ボランティアという気持ちではなく、まずこの目で見る、出来ることをやる、ということ肝に銘じました。

今でも、そういう気持ちはあります。でも今回の活動に参加し、そうじゃない、自分が偽善なのではと疑い、責めなくてもいいのかもしれない、と感じられた事がありました。何度か神戸に来て、炊き出しをしていた男性の感想会での発言です。

「今日感動したことは、自治会の人が餅つきの話を持ち出してくれたこと。一緒に何かをやろう、と話をもちかけてくれたのがすごく嬉しい。」

被災者と、そうでない人達が一緒に何かをする、そこには立場の相違という事実はあっても、距離はないんだと思いました。目からうろこが落ちた気がしました。

そこには、立場を越えた人と人とのつながりがあり、関わりがあるんだと思いました。そうなるまでの努力と活動を支える人達の思い、心は、私の危惧など及ばない、素晴らしいものだと思います。尊敬します。

被災者の皆さんの安息と、神戸の復興を心より願い、必ずまた、神戸に行きたいと思っています。

震災が起きて、多くの人が今までに無い経験をした。私もその一人だった。初めのころ、今までのボランティアというものに対する固定観念に縛られて、こうあるべきだ、こうしなければならないという枠に無理矢理当てはめていたため、随分と苦しんだ。しかし、多くの人と触れ合っていくうちに、ボランティアと被災者という壁がなくなり、人間と人間という自然な接し方ができるようになった。心と心が通じ合うってことがこれ程素晴らしいものなのかと感じた。

ボランティアとは、特別なものでも偉いことでもない。美化することはいくらでもできるし、理論付ければいかにも最もらしいことになるのかもしれない。しかし、それをしてしまうから取っ付きにくいものを感じてしまうのだと思う。もっと自然に考えられないだろうか。ボランティアというと、無償の奉仕といわれるけども、確かにお金が目的ではないからそういった意味ではそうかもしれない。けれども、私はもっと他に、心の奥深くに訴えかけるような、人間だからこそ得られるとても貴重なものが返ってきているように思う。だから、無報酬ではない。お金も大事だけど、もっと大事なものが得られるから、それが楽しくて継続できるのだと思う。また、自己満足ではいけないと言われているけど、一方的ではなく、相互関係の成り立った自己満足ならいいと思う。もし自分が満足できていないのなら、無理を生じているか、義務感からやっているのであり、相手に気持ちが伝わらないだろうし、何より、自分が楽しいとか、嬉しいとか、満たされているとか感じなければ長続きしないだろう。相手が喜んだ、だから私も嬉しい。で、いいのではないか。「人のためは、自分のため」だと思う。

私は、ボランティアを通して人間が好きになれたし、信じることもできるようになった。そして、嫌なところも一杯あるけど自分自身も好きになれたような気がするし、信じられるようになったと思う。今まで、どちらかというところと全てのものに対してあきらめというか、妥協するというかニヒリストっぽいところがあったのだけれども、全くと違っていいほど考え方が変わった。自分がいかに目に見えるものに支配されていたかが分かった。理屈では物より心だと分かっているけど、やっぱり経験してみないと本当には理解できない。普段から、目先の利害関係に捕らわれず、思いやりの心をもって他人と心の交流ができる人ならいいけれど、今の社会ではなかなかそういう人はいない。人間だからしょうがないと言ってし

まえばそれまでだけれども、でも人間だからこそ、そういった思いやりという気持ちが自分の中にあることを忘れてはならないし、忘れたとしても思い出す必要があると思う。そのためには、ボランティアはとても有効だと思う。皆が皆、ボランティアを通してそういうことを思うかどうかは分からない。またその人には別の方法があるかもしれない。けれども、やってみて損は無いと思うし、それによって不幸になることは無いと思うから、是非経験してほしいと思う。でも、そこで大切なのは、相手のことを考えるとき、自分の計りで相手を計ってしまって、分かったような気になるのではなく、分からないかもしれないけども、相手のことを分かろうと真剣に努力することだと思う。前者と後者では相手に伝わるものが全然違うと思う。私は、このことを震災のボランティアに行って学び、日常でも実践できるように心掛けている。

最後に1つ。きれいごとを言わせてもらえば、そうやって人の輪が広がって、皆が生まれてきてよかったなと思えるようになることを願っている。



まず、最近のことから書きますが、私は実習先の老人ホームで偶然に神戸出身の老婦人に出会いました。部屋でその方とお話している時に出身を知り、「実は震災のボランティアに行っていたのですよ。」と切り出したら婦人は「私が住んでいたのは昔だから、今のことは分かりません。」と関係のなさそうな様子を見せたので、話はそれだけで終わってしまいました。

実習も終わりに近づいた頃、普段は挨拶程度だったその老婦人が瞳をうるませながら私の所へいらっしゃって、「神戸に行って下さったのね。神戸の人を助けてくれてありがとう。今度、こちらで何かあればお助けします。もちろん、何も起こらないことを祈りますが。」とおっしゃっていました。

その時私は、「ボランティア」という名で自分がしてきたことの大切さに気づいたような気がしました。そして半年前の事がわき上がってきて、老婦人と知らぬ間に握手を交わしていました。私は感動のあまり何も答えられませんでした。ただ、何度もうなづいたことを覚えています。

私がボランティアに参加したのは2月6日から13日までの1週間でした。とりあえず「たつの子」のサークル員なので「大阪ろうあ会館」のボランティアを引き受けました。

それまで、私を含め周りの人は「ボランティア」というとテレビや新聞で報道されているように、神戸などの被災地に入って行って炊き出しや水汲みのお手伝い、という「現地だけ」という考えでした。だから私も「自分の食物に困らないように。」とか、「現地で泊まりになったら怖い。」と思い、気合い十分で大阪へ向かいました。

ところが、神戸へ行けたのは1度だけで、あとは毎日送られてくる救援物資を仕分けしてダンボールづめにしたり、圏内の聴覚障害者の方の安否確認表を壁に貼り出すことや、ファックスで情報を送ること、友人の安否確認や物資を運んで下さった聴覚障害者の方と会話することぐらいでした。しかし会話といっても大阪の手話は名古屋のとは異なり、会話にならず筆談ばかりでした。何もかもが初めてだったので、毎日が自分達のはやる気持ちとの戦いであったと言っても過言ではなかったと思います。毎日、ダンボールに物資を分けながら「本当にこんなことをしていて役に立つのだろうか。」と不安になっていました。ろうあ会館の方も何を任せたら良いのか苦心していらっしゃいました。

そんな時、夜のミーティングで「後方支援」という言葉を耳にしました。どんな場面でその言葉が出てきたのかは覚えていませんが、私達が行っていることは目立たないけれども最前線で活躍しているボランティアの人の足掛かりになっていると聞き、ようやく納得できました。第1陣で「緑の下の力持ち」として基礎を作れたからこそ、第二陣以降の人

の仕事がうまくいったということも、学校に帰ってきてから毎日難波別院から送られてくるファックスを見て知り、やっぱり無駄ではなかったと思えるようになりました。

帰る日に、一緒に参加していた友人のいとこの方が北区に避難していらっしやるので、もっと神戸を見たいと思い、連れて行っていただくことになりました。北区から長田区にあるその方のマンションまで行き、最後に三宮と元町へ歩いて行きました。他の地区で様々な倒壊、火災現場を見てきましたが、三宮・元町はサークル旅行で来たことがあるのでまた違った意味でショックでした。三宮を歩いていると、ビルがあらゆる方向に傾いているために目の錯覚で気分が悪くなり、まっすぐに進めませんでした。元町では南京町で店内が崩れ落ちたような所でも気丈に店先で食物を売っており、活気もあって復興も早そうだと思います。今回は行けませんでした。淡路にも昨年お世話になった方がいるので心配していました。

今思うに、もしこの震災が神戸・淡路でなかったら自分は参加したかどうかと考えると必ずしも行かなかったと思います。奥尻や雲仙のニュースを見聞きした時は、「自分に何ができるか」などということは考えてもみませんでした。史上最悪の惨事と言われ、お世話になった土地だからこそ、「何かしなければ」という強い意志が持てたのだらうと思います。

震災以降いろいろな特集番組がテレビで生まれ、出来る限り見るようにしてきました。8月いっぱい体育館は避難所として機能できなくなりました。仮設住宅が手に入らない人、当選しても遠すぎて行けない人、仮設住宅で孤独になり死を選んだ人……。まだ問題は山積みです。行政と住民との対立もあります。神戸だけで解決しなければならないことも多いでしょうが、まだボランティアの力が必要になることも多々あると思います。

私は、4年生なので以降のボランティアには参加できませんでしたが、今でも頑張ってくださいD.V.Nの方々には本当に頭の下がる思いです。

さて、今年は「ボランティア元年」と言われ、学生の真の力が試された年でもありました。そこに身を投じて一緒に頑張ったことを誇りに思います。

あのいまわしい震災から約8カ月が過ぎようとしています。今年は特に酷暑日の多かった日々を被災地の方々はどう過ごされたのでしょうか。

私が家族と一緒に神戸を訪れたのは2月の初めでした。連日テレビや新聞での報道に胸を痛め、私に出来ることは何かを考えていました。仕事の関係上お風呂を現地で入らせてあげることが出来たらと思い、市役所や対策本部に連絡を取って（パニック状態で十分な連絡を取ったとはいえない）不安をかかえたままで食料や燃料を積めるだけ積んで出発したのです。いつもは3時間で行けるところを8時間以上かけてようやく現地に着きましたが、実際に目に飛び込んで来た風景は目を覆いたくなるようなものでした。思わず絶句し、その後涙が出て止まらず、大きな自然の前のちっぽけな自分をいやという程見せつけられました。でも「私に出来ることで一人でも喜んでくれる人が居たらそれで良い、多くの方が自分の出来る精一杯をやってあげたら徐々に徐々に役立てるかも知れない、まずは一生懸命関わっていきこう」と心に決めたのです。その後約4カ月半、毎日、風呂付移動バスで現地の人達2～300人の方々が入浴され、1週間ぶりとか10日ぶりとか言われ、疲労しきっていた顔に笑顔を見た時、私はこの笑顔のために、これを見せてもらうためにここに来たのだと初めて実感出来たのです。

今もボランティアを通じて知り合った現地の人達との交流が生まれ、今後も続いてゆくでしょう。現地に行って20日間程過ぎた頃、新聞が私達のことを取り上げて下さいました。報道の力はすごいと思いました。大勢の方々が、新聞を見て問い合わせを下さって、長期に亘ってボランティアを続けることが出来ました。私自身どこにも所属することなく2人の息子と行っておりましたから、限界を感じていました。人々の善意をこの時程感じたことはありません。

日本においてはボランティアの意識は導く一部の人達の行動のように思いますが、少しずつ変えてゆくことの義務が私達にはあるのではないのでしょうか。いつどこで何が起こるか誰にもわかりません。しかしながら助け合いの精神の“ネットの会(注) 震災から学ぶボランティアネットの会)”を大きくしてゆくことで、やがて大きな道になってゆくことと思います。皆それぞれの立場で社会に貢献しておられる方々の集団ですので、時間は生み出すものですから暇を持て余している方の仕事ではありませんので、激励しあいながら頑張りましょう。

## § 対立の時代を超えて

かつて世の中は対立の時代であった。一方が他方の悪口を言い、責める。言われた方が仕返しに非難をし、やっつける。そこで生まれるものは、不信感の他に、権力を持っている者の成果だけである。反権力の旗印は純粋に見えるが、何か成果を上げることができない。世の中を変えていくのは、自らが手を汚してでも直接参加していくことではないだろうか。直接民主主義という言葉が当てはまるかどうかは疑問だが、ボランティアという言葉は、このことにピッタリのように思う。

ボランティア活動には、ぜひ若い世代が先頭に立って欲しい。中年の生き甲斐のためにも、ボランティアは最適である。優しさ、思いやりの心を育てるのにも良い。社会参加で前向きに明るい人生を送りたい。（サンガムNo.10より抜粋）

## § これからは、ボランティアの時代だ～宝塚市を尋ねて（前編）

### —ボランティア元年—

かつてこれだけの数のボランティアが日本の中で動いたことがあっただろうか。誤解を恐れずに言えば「物見遊山」も含めたボランティアの人達は今までにない数だろう。これはいま突然始まったのではなく、すでに海外への援助活動や、老人・障害者へのヘルパー活動など、（ブーム）は何年か前に始まっている。逆にODA（政府開発援助）に対する理解は年々悪くなっている。NIC（名古屋国際センター）の『NIC NEWS』'95年3月号によれば、「ODAの経済協力を積極的に進めるべき」と答えた人は、'91年の41.4%から'93年には32.6%に減り、3年連続の低下である。これは行政に委ねるより、自らの手足を使った援助にウエイトが移っている証しである。こういう大きなうねりの延長に、今年（2000年）の1月17日以降の阪神地域でのボランティアの大活躍があったというわけである。

### —出かける前の心構え—

ボランティアには出かけてみたが、何をしたいかわからない人がいたようだ。逆に食事や寝処をお世話になってしまい、これでは、避難民が一人増えたことになってしまう。何のためのボランティア活動かわけがわからない。これは海外にボランティアで出かける時も同じで、自分が逆に負担になることがないように心がけたい。自分の体力に自身がなかつたり、具体的な援助能力がない時は出かけていけないのも立派な決断と言える。

いずれにしても、日常生活をする能力は非日常の事態の中でも同じように必要であるということを知っておかねばならない。これはつまり、あなたの日常生活がしっかりして

いれば、非日常の中へ入っても何とかやっていけるというふうに言い換えることができると思う。さあ、あなたは今日から据え膳ではやっていけない。

—人間として生きるための援助をする—

避難民はみじめな人、またはみじめであるべき、と考えてはとんでもない間違いを犯してしまう。途上国に出かけても、現地の人にはできる限り悪い環境にいることを期待してしまう。思ったほどひどい境遇にいない時は、何だか期待外れのように思ってしまう。

こういう古い固定観念はすぐにでも捨て去りたい。援助物資の中にとんでもない失礼なものが混ざっているのはそういう考えからなのだろうか。対等な人間として助け合っているのだと考えたい。明日あなたが避難民になれば必ず対等に扱ってほしいと考えるはず。

—健康を守る（無理の限度を知る）—

援助に熱心なあまり死に至ることがあると報道された。幾分それが美談めいて書かれてあったのは死者への遠慮以外何ものでもないと思う。本当は、自分の限界を知らずに働く人は過労死と同じくほめられるべきことではない。どの世界でも自分の才能を持続的によく発揮している人は、自分の守るべき生活リズムをよく知っている。ボランティアに行っても、心構えは同じでありたい。よく食べ、よく眠る。自分のペースを守る。疲れたら休む。他人と自分は人間が違うことを知り、仕事の仕方が違うとって非難もしないし、非難もされない関係を作ることは重要である。これが守られてから初めてまとまりあるチームになるのではないか。

過労死は労働災害認定で救いの道があるが、ボランティアでの「過労死」に救いの道があると思わない。ご注意ください。（月刊中部リサイクルニュース95年5月号より抜粋）

---

さまざまなボランティア活動に携わりながらこのような文章の執筆もされている滝川さんにはDVNのメンバーも大変お世話になっております。

— お わ び —

DVNの不手際により、お寄せいただいた原稿を紛失してしまった為、滝川さんご本人の了解を得た上で、上記のような形を取らせていただきました。この場をお借りして、ご本人ならびに読者の皆様に対し、深くお詫び申し上げます。

私は、第1陣で参加しました。その時は何もかもが手探りで進められていきました。震災当時、1年生ながらリーダーもやらせていただき、障害者分野を中心に活動を進めました。さまざまな活動の中で、自分の無力さとボランティアの難しさを知りました。ボランティアには、自己との葛藤と仲間との関係がいつもついてきました。その中で多くのことを学び、考えさせられました。自分が何をすべきなのか、何をしなくてはならないのかを常に考えながら、ボランティアを行うことが求められました。現地のニーズと私達の考え方が合わないで、悩み、またもめることもありました。しかし、そこで大切なのは話をするということでした。意見が対立したからといって、あきらめたり何も言わないで地元に戻ってしまっただけでは、何か足りない気がします。

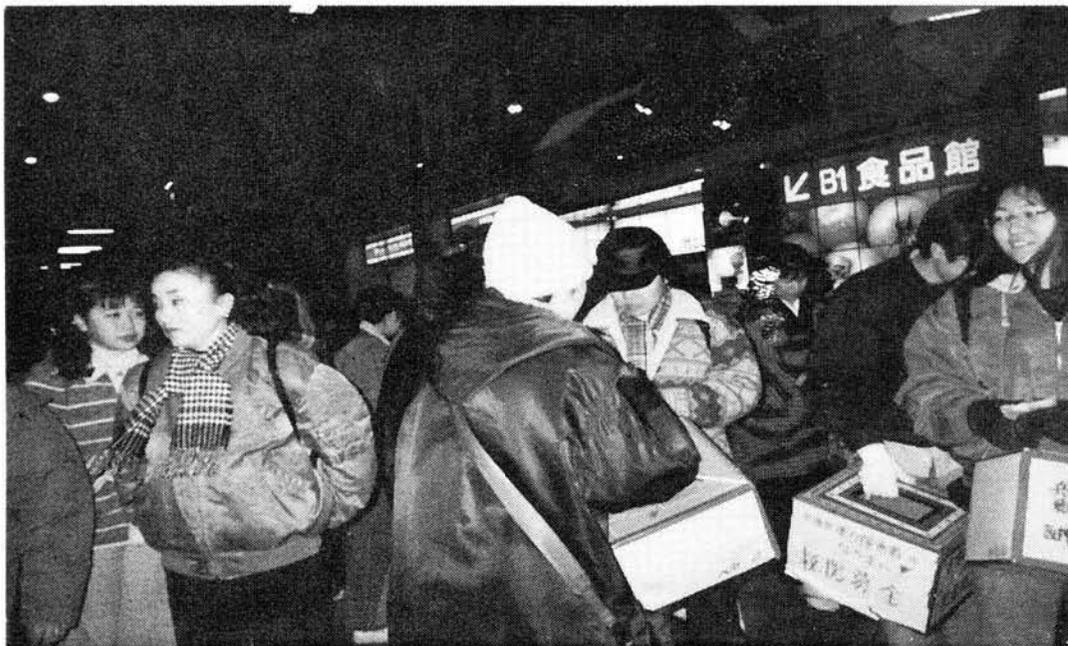
私は、現地で1カ月半の活動してきたのですが、それはすべて多くの仲間によって支えられてきたからだだと思います。学年やサークルの壁を越えて意見を交換し、活動することで、自分自身にとって新たな発見や成長があったと思います。この1年を振り返って見ても、仮設住宅でのボランティア、現地施設との交流やボランティア、名古屋での震災支援バザーなど、様々なかたちで活動し、気がつくくと神戸の町にいたような気がします。学校に帰ってからも、いろいろな人と話ができ、他のサークルの話やボランティアの話、学校の話ができてよかったです。

「ボランティアとは一体なんだろうか」と考えさせられた震災ボランティアだったと思います。確かに、お金も体力も時間もかかり、大変だったと思いますが、それ以上に大切なものを得たような気がします。バイトや自分の生活、自由時間、学校のサークル活動などの多くの犠牲や、理解や協力があって、始めてできたことなのだと思います。快く「行ってこい。後のことは何とかするから」と送り出してくれたからこそ、何の心配もなく活動できたのだと思います。本当に感謝しています。

そして今、ボランティアを続けているのは、一緒に活動する多くの仲間がいるからだだと思います。一人ではきっと何もできなかったのではないかと思います。みんなとだから頑張れる、みんなとだからできる、といったことばかりなのではないだろうかと思っています。ボランティアには様々な形で参加することができるの

です。実際に現地で活動するばかりではないのです。今までどおりの生活を続けている残された人達もまた、ボランティアだと思います。特に何かをしなければならないとか、震災の現地に行かなくてはならないといった義務感や使命感にとらわれなくてもよいと思います。募金活動や救援物資などの支援もまた、ボランティアだと思います。

震災後1年が過ぎ、ボランティアの意識も変わってきています。「ボランティア元年」——この言葉にふさわしい1年だったと思います。これからも、僕のボランティアは続きます。



去年1月17日に起きた阪神・淡路大震災は、人々の心に大きな衝撃を与えました。そして、あの日の朝のことは誰もが忘れないでしょう。

あの日の朝、地震の揺れで目が覚め、すぐにTVのスイッチを入れ、地震情報に注目しました。しかし地震直後だった為、TVではまだ詳しい地震情報は得られず、私は安心して、もうひと眠りしました。そしていつもの時間に目を覚まし、朝方の揺れが気になって何気なくTVのスイッチを入れたその瞬間、まるで体が凍りついたかのようにTVの画面の前に立ち尽くしてしまいました。

「これが神戸か」そんな言葉が何度も何度も頭の中を駆けめぐり、まるで戦争映画の1シーンを観ているかのように、今いったい何が起きているのかすぐに理解することが出来ませんでした。そして高速道路が横倒しになっている様子や、民家・ビルの崩壊・炎上・鉄道の寸断など現実の世界のものがその形を逸しているのを見ているうちに、涙が頬を伝うのを感じました。この時やっと「これは神戸なんや」と理解することが出来ました。そしてしばらく涙が止まりませんでした。

2月13日、大学の呼びかけでようやく神戸入りすることが出来ました。途中、阪神電車の窓越しに見る風景は、TVの映像とは比べ物にならないほど凄まじいもので、見るに耐え難いものがありました。次の日からさっそく芦屋市内の避難所である小学校で、ボランティア活動を行いました。震災直後から半月以上経つにもかかわらず、避難所では多くの人々が生活を共にしていましたが、皆で協力し合って食事の準備をしたり、救援物資の分配をしたりと、集団生活の中で自然に培われてきた姿がいたる所で見られました。この活動を通して多くの人の“裸の心”に触れたような気がします。「人は一人で生きているわけやない。他人がいて、初めて生きられるんや」そんな当たり前のことに、改めて気付かされた思いでした。しかし、被災者の人の「お前ら何しにきた、お前らに何ができるんや」この一言が今でも自分自身の心の中に引っ掛かっています。

震災から1年が過ぎ、あの頃のことを今振り返ろうと思うといろいろな事が頭の中を巡ります。「あの時の教頭先生元気かな、炊き出しの豚汁をおいしそうに食べてたおばちゃん、おっちゃん元気かな、あの壊れていたお店、営業再開してるかな……」と。

震災から1年が過ぎて、今一番思うことは、1月17日に受けたさまざまな思いがある限り、まだ何一つ終わっておらず、これからが本当の意味での始まりだということです。あの時の出来事は一生思い出にする事は出来ないであろう。

私は2月中旬と、3月中旬に計13日間参加しました。そのたった13日の間に、色々な人と出会い、色々なことを話し、色々な事を考えさせられました。

まず、1番に考えさせられたのは、被災された方々のプライバシーが多く所でなかったことです。特に、安否確認と水汲みをしに訪ねた、目の不自由な御夫婦の家で、「色々な人が1日何回も来て水汲みをしてくれる。」と言いながらせっかく来てくれたからと、私たちの為に水汲みの仕事をわざわざ作って下さいました。もし、私が体が不自由で災害に遭い1人で生活できなくなっても『ボランティア』と言う見知らぬ人が家に来て「何かする事はありませんか。」と聞かれても、答えられないと思います。やはり、日頃から担当を決め、イザという時に担当者が責任を持って対応していかなければならないと思いました。そうすれば、何回も同じようなボランティアが家に来ないですむ上、そのボランティアも他の所で有効に力が使えると思います。

次に、ボランティアに参加した人や、様々な理由や考えによって参加しなかった人と話をしているうちに、人の考えは多岐にわたっており、それぞれが自分の考えに従っているので、「ボランティアに行った(行く)。」と言うと、多様な返事が返ってくる事を知りました。興味がある人は、活動内容などを聞いてくれましたが、今回のボランティアに対して否定的な人は被災された人達の話も聞かず、義援金に対しても理解を示してもらえませんでした。

まだまだ、今回のボランティアを通じて見えてきたことは沢山ありますが、それはこれから出会っていく人達に、私なりに伝えていきたいと思っています。



阪神・淡路大震災のボランティアとして95年の2月13日に出発してから、はや1年が経とうとしています。大阪での私の活動は、後方支援といわれるものでした。2月は大阪ろうあ会館で救援物資の仕分けや事務作業、3月はHABIE（阪神・淡路大震災視覚障害被災者支援対策本部）で事務作業。相手の見えないボランティア活動を続けてきました。ひたすら電話を待つだけの日もありました。1日中ファックスを整頓するだけの日もありました。「私はいったい、ここで何をしているのか」毎日そう思っていました。

今、あの頃を振り返ってみると「私がここにいないければ他の人の仕事が増えてしまうから、私はここにいるんだ。きっと役に立っているんだ。」そう思いこもうとすることで何とかこなしていた毎日だったような気がします。頭でわかっている、手応えのない活動はどこか空しいものでした。

それでも大阪でのボランティア活動を続けてこれたのは、現地ボランティアのサポートをしている私たちの後ろに、私たちを支えてくれている人たちがいることに気がついたからです。何十人もいる私たちボランティアを毎日どこに何人送るかを考えるコーディネーター、宿泊施設を提供してくださった難波別院の方々、宿泊場所と活動場所を探し、大阪対策本部という拠点を作ってくださった学校の職員の方々、頭に描いていたボランティア活動と現実の活動のギャップに悩む私たちに、差し入れと助言をくださった先生方。この人たちがいなければ、私たちの活動はできませんでした。他にもたくさんの人たちが、遠く離れた名古屋から私たちを支えてくれていたのです。そしてこの人たちの存在は「震災支援は名古屋からだってきっと何かできる」ということを私に確信させてくれました。

そうして私は名古屋でDVNの一員として、震災支援を始めました。大阪での活動と同じ、相手の見えない活動です。そして大阪にいたときと同じように、私たちの後ろにはたくさんの人たちがいて、私たちを支えてくれています。学校の職員の皆さんや先生方ももちろん、私たちのために遅くまで学校を開けてくれた警備員の方たちには本当に感謝しています。そしてサークルにもあまり行けなかった私に文句も言わず「気にしなくていいから頑張っってね」と言ってくれたサークルの友達や、朝から夜遅くまで出掛けている私を怒りもせず「自分の好きなようにしたらいい」と言ってくれた両親。私は本当にたくさんの人に支えられています。DVNのメンバーみんなが、同じようにいろいろな人に支えられて活動をしています。そういった人たちによってDVNの活動は成り立っているということは、私たちを支えてくれている人は、実際に活動をしていなくてもある意味で後方支援というボランティアなのではないでしょうか。ボランティアひとりひとりがこうやってたくさんの人に支えられているのだとしたら、誰もがどこかで自分でも気づかないうちにボ

ランティアをしているのかもしれませんが。こうやってボランティアの輪は何重にもなっているのだと思います。

『ボランティア=汗水たらして働くこと』という私のなかにあった観念を崩してくれたのも、わたしの後ろで支えてくれている人たちでした。この人たちはわたしの考え方も変えてくれたのです。皆さん、自分の後ろを一度振り返ってみてください。後ろにはきっとあなたを支えてくれている誰かがいるはずです。

震災の中にいる自分

同朋大学 社会福祉学部4年

牧野 茂

11月5日の、ひらき座の「おなじ」という演劇を見た。今年の震災をテーマとしたものだったが、この時日常の中で震災を忘れていっている自分を痛いほど感じた。同時に、「地震のあった朝、この名古屋の地で情報を見ながら私は何を思っていたのだろうか。」そんなことを考えた。

私は2月初めから3月終わりまで、またその後のゴールデンウィークや夏期休暇を利用して、被災地で活動した。2月は、その日その日のニーズに合ったことをとにかくこなしていった時期であったし、3月はその中でも“VOWS CAFE”中心にやっていた。ゴールデンウィークはデータの処理等で、夏期休暇は仮設住宅における活動をした。また、4月からは、DVNの活動にも参加している。

これだけ見れば、私は震災支援の活動を続けているように見える。実際形の上ではそうである。

しかし、本当の意味でそれについて考えたことがどれくらいあるだろうか。勿論、四六時中考えているか、ということではない。

例えば被災地の情報を展示するために調べて大きな紙に書き写すのに、その内容をしっかり読み、考えながら書いているのか、それともただ書き写しているだけなのか、そんなことを思うのである。私は正直言って後者であることが多い。

では、2月、3月はどうだったのだろうか。この時は当然のことながら、地震を毎日自分の肌で感じていた。被災地に実際に行く行かないにかかわらず、朝、難波別院を出発し夜にはまた、難波別院に帰り温かい風呂に入っていたけれど、ある意味で震災が日常だった。それ故、震災はある種自分のことだったし、とにかく目の前にあることを1つ1つ無

我夢中でこなしていったと思う。(ただし、その全てが必ずしも純粋な気持ちであった、というわけではない。)だから考えてみれば、震災の事を忘れていくことなど考えることのない世界にいたように思う。時間が経ち、被災地から離れてしまったら、震災も遠いものになってしまったように思う。自分がそうしてしまったのかもしれない。“VOW S CAFE”で活動した時に思ったことも、宮塚公園の入浴介助で見たお風呂に入ることの大切さも、忘れてしまっていた。

改めて、今までの自分の活動をまとめてみようとしても、なかなかまとまらないのが正直なところだ。しかし、確実に言えることは、2月からの2カ月間の活動が今の私の基盤になっているということだ。被災地で実際にいろいろなものを貰った。今の私は、その貰ったものを活用しないでそのまま大切に押入にしまってしまうだけのように思う。

結局よくまとまらなかったが、少なくとも、震災はまだ終わってはいないのは事実である。預金がほとんど無くなって、就職口もなく明日食べるものもままならない人も実際にいる。それに対して私の出来ることはほんのささやかなことだけだと思う。それでもできる限りはやりたいと思う。

僕は、1人では生きられないから。



私は2月から3月にかけて、合計で3週間、現地で活動しました。その後は4月に1日活動しました。現地での救援活動といえるものはそれだけですが、4月に2回、9月に2回、現地の様子の視察に行きました。

名古屋では、DVNの活動に時折参加するだけです。DVNで人手の足りないときに自分の出来るわずかなことをたまにするだけです。他の皆がイベントの準備などで忙しい時にも、特に何もせずに、ただそこにいただけでした。

被災した現地を最初に目の当たりにした時には、言葉がほとんど出ませんでした。自分がブラウン管でしか見たことがない惨状は、どんな言葉よりも私の心に強く呼びかけてきました。この状況で助けを求めている人達がいる。自分にできることは何なのか、何をするためにここまで来たのかも分からないけれど、今、自分はこの瓦礫の被災地にやってきているのだ。とにかくできることをやろう、と。

それから私はたった3週間の間に、様々な活動に参加しました。家が半壊した人の引っ越しの手伝いや、泊まり込みで避難所の管理、救援物資の配送、炊き出しなどに参加しました。やっていた、ただそれだけだった気がします。大阪の本部に帰ってきて、皆とボランティアについて議論をすることがよくありましたが、いつも自分の考えのなさに情けなくなるばかりでした。本当にただ活動していただけでした。

私が被災地でしたこと、それは本当に何も躊躇することなく活動したことだけではないでしょうか。あれこれ考えるよりも、今のその活動が必要であるならばまずそれをやるのが、私の活動の根本だったと思います。

こうは書いているものの、自分自身の中では被災地での活動に対してまだ結論はでていません。きっと今のままではいつまでも答えはでないでしょう。9月に自分が訪れた所を見て回りましたが、2、3月のままのところはまだまだあり、正直愕然としました。

4月に大学で救援活動報告会がありました。その準備の時に私の後輩が、名古屋の夜景を見ながら言いました。「何年か経って神戸の夜景を見た時、『自分はこの夜景を取り戻すのために参加したんだ。』と思うんでしょうね。」私は彼の言葉に感動しました。彼の言うその時が一刻も早く訪れることを私は願っています。そして、その時に私の答えも見いだせるでしょう。それまで私は1月17日にあったこと、そして、その後のことを忘れずに、わずかながら支援を続けていきたいと思っています。

兵庫県南部地震発生から1年以上が過ぎた。自分自身としては、この1年がとても早く駆け抜けていったように感じる。震災被災者支援はこれからも何らかの形で続けていこうと考えている。なぜならば、まだ震災は終わっていないからである。仮設住宅に移り住むことで派生するさまざまな問題（孤独死、転居 e t c）、失業・雇用の問題、地域づくりの問題など、地震により浮き彫りにされた多くの諸問題を抱えているのだ。これらは、天災発生後に二次的、三次的に発生する災害であり、人災（人間が造りだした災害）だといえる。人災を含め、「震災」という言葉を使うべきではないだろうか。現地での直接支援は終結しつつあるが（成熟していない日本の福祉社会は、まだ直接支援を必要とする人々をつくりだし、また仮設住宅におけるコミュニティの欠如は深刻な問題となっている）間接的支援の必要性は十分にあるのだ。

被災した都市の復興には10年以上かかるといわれている。震災によって今まで見過ごされていた日本が抱える問題を再確認できたこと、つまり、「震災」での問題が私たちの“街”の課題でもあるということを確認できたことは、私たちにとって重要だったといえる。特に私たちは、被災者支援のためのボランティア活動をしたことがそれらの問題に多少なりとも気づききっかけになったのではないだろうか。「ボランティア元年」などと呼ばれた1995年であるが、この年に学んだことが自分自身に、そして、多くの人々に活かされるようにしていくことが大切なのではないかと感じる。また、被災された方々もそうすることを望んでいるであろう。

今回の地震によって、私は「ボランティア」ということについて考えた。「ボランティア」が何か特別なことであるという感覚は私にはもうないのだ。ある人が、「ボランティア」は「恋愛」に似ていると話していた。確かに私もそう思う。こんなことを羅列してどうなるんだとも思うが、恋多き若者たちにとっては、わかりやすく「ボランティア」を理解できるのでは…ということで「ボランティア」と「恋愛」の類似点を挙げてみるとしよう。

ボランティア	恋愛
<ul style="list-style-type: none"> <li>・自発的な無償の行為である。 （基本的には無償であろう）</li> <li>・対象を選べる。 （自分にあった活動を）</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>・（基本的に）報酬を求めない。 （たぶん）</li> <li>・年齢、性格、性別など選べます。 （この人となら…）</li> </ul>

<ul style="list-style-type: none"> <li>• 「好き」が選択のポイント。 (e x. 子どもが好きである)</li> <li>• 「機能」以上に「存在」に意味がある。 (「~しよう」という気持ちが大切)</li> <li>• 出会いは偶然・突然。 (友人からの紹介も多々ある)</li> <li>• 辛いこともあるが、自分も元気になる。 (苦しさを越えると喜びに変わる)</li> <li>• 自分が満足だけではだめ。 (相手があつてのボランティアです)</li> <li>• 続けることで多くの出会いがあるが、続けるだけになる場合がある。 (活動内容の「質」の向上)</li> <li>• 止める時、別れる時は辛い、難しい。 (ボランティアの引き際は肝心)</li> <li>• 熱くなりすぎて自分を見失う時がある。 (自分の生活があつてのボランティア)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>• ○○さん大好き。 (e x. 年上が好きである)</li> <li>• 「だらしない彼なんだけど一緒にいるとなぜか気持ちが落ちつくの。」</li> <li>• 偶然の出会いから恋に発展。 (友人からの紹介もたまにある)</li> <li>• 辛いことばかりじゃない。喜びもある (のかなあ)。</li> <li>• 相手の気持ちも考えて。 (善意の押しつけは迷惑かも)</li> <li>• マンネリ化は禁物。 (つきあつて3ヵ月、半年、1年、3年目はマンネリ化しやすい。)</li> <li>• 別れは辛いものです。 (「あばよ。」と大きな声で)</li> <li>• 「恋は盲目」などといいます。 (自分の生活も大事に)</li> </ul>
---	--

以上の表によって挙げたことがボランティアの特徴であり、恋愛の特徴なのではないかと考える。また、最も大きな特徴として挙げるならば、どちらもマニュアル化できないということであろう。自分自身のスタイルで個性を生かすことが大切なのではないかと、そして、誰にでもやろうと思えばできるのではないかと私は考えます。ボランティアをする側とされる側の相互関係については「恋愛関係」というよりは、「よいお友達関係」でありたいものだ。(「よいお友達関係」から「恋愛関係」に発展するという例外もある。)

このようなことを踏まえながら、ボランティア活動にも恋愛についても励んでいこうという所存である。

「ボランティア2年、3年…」に「ボランティア元年」に学んだ多くのことが少しでも自分たちのこととして活かされていることと、本当の意味で「震災以後」と言える日が少しでも早くやって来ることを心から願っている。 おしまい。

率直に言って、私が震災ボランティアに参加した理由は2つある。1つ目は、何かしたいという純粋な気持ちがあったから。2つ目は被災地が阪神地区だから。

ここで、もし阪神地区が被災地でなかったらボランティアしなかったのと聞かれたら、多分「その通り」と答えたかもしれない。他の人が聞いたら、薄情かもしれない。しかし就職活動を控えていたこともあり、ボランティアで一生を捧げ振るたくなかったからである。なすり付ける訳ではないが、今回震災ボランティアに参加した人数は3月下旬時点で約115万人いたが、被災地が阪神地区でなかったら、どれだけの人間がボランティアに参加したことだろう。これを裏付けるデータがある。数年前に起こった雲仙普賢岳の大爆発で、被災地熊本県に出掛けたボランティアは約2万人らしい。時期も場所も違うので単純比較は出来ない。今回これ程ボランティアを行った数が多いのはやはり、未曾有の天災と言うこと、そして、被災地が阪神地区で、交通の便が良いということ、そして、福祉ということがクローズアップされてきて、気軽にボランティアが出来そうだったからではないだろうか。

私はDVNの前身、『同朋大学阪神大震災大阪対策本部』の活動に参加したのがボランティアの経験としては初めてで、始めた当初は気負いしたり、義務感があったりと、力を入れすぎたこともあったが、人から話を聞いたり、物事を経験していくうちに、もっと楽しめた方が応援される側も、する側も遠慮することがなく、コミュニケーションをたくさん取れるのではないだろうかと考えるようになった。それ以後、少しずつ手を抜くこともあったが、そういう時があったからこそ、現在もボランティアする事が出来るのかもしれない。

現在95年12月。後1カ月で震災から1年が経過し、ボランティアを始めて1年になる。感想などは書切れないほどある。あの時にこうしたらよかったと悔やむことがあったり、写真を見てあの時は楽しかったなどいうように。

よく、友人に「大変だね」とか「立派だね」と言われることがあるが、私自身は別に人に労ってもらうためにやっている訳でもなく、自分が楽しい、好きだからやっているだけである。しかし、ボランティアの他にもしたいことがたくさんあるので、そちらをしながらゆっくり老後のライフワークとして長く細々と活動していきたい。

震災直後はボランティアが被災地の至る所で活動して、マスコミも、「ボランティア元年」と報道して、多くのボランティア団体が出来たが、現存している団体及び人間はどれだけいることだろう。それぞれの目的を果たしたと思い、その結果活動を終了したことだろう。

日本人はそもそも長く続けることが困難な人種である。性能の良い車や家電製品が出たらすぐに替えたりする。飽き性な性格である。だからボランティアも長く続ける事が出来ない。勿論、この中には金銭的、時間的に余裕がない人や、家庭・職場で理解が得られないために、仕方なく続けることの出来ない人もいるが……。

取り留めのない文章になったので、こらでまとめに入りたい。

ボランティアを行うにあたって1番必要だと思ったことは「指示待ち族ではない」ということではないだろうかと思う。ボランティアというものは、自主性の元で成り立っている。この方法が良いと思うなら、提案していく必要がある。どんどん発言して行動して行かなくてはいけないのである。もし、その方法が最善でなかったら、次に行く時に皆で考えたら済むことである。やる前から「失敗したらどうしよう」と思う前に行動に移すこと。これに尽きると思う。同朋大学主催の炊き出しを行った時には、数々の反省があった。それらがあったからこそ、バザー等が成功しているのである。

感想文らしくないが、他の皆はやってきたことを書いていると思うので、私はやってきたことを踏まえて私が思ったことを書いてきた。これを読んで皆さんはどう感じただろうか。

特別なことだけがボランティアではない。「ボランティア」というとどうも介護福祉というイメージだが、もっと身近なことから始めることが出来る、そういう気軽さがボランティアにはあるのだ。道を尋ねられたら教えてあげる。ゴミが落ちているのが目についたら拾ってごみ箱に入れる。老若男女誰でもすぐに始めることが出来る。

さあ、あなたも身近なことから始めませんか。「えっ何を」って、勿論、ボランティアを……。



## 大震災から問われていること

敗戦後50年の節目を向かえて、心新たに戦後の日本を考えようとする機運も高まっていた95年の正月も半ばを過ぎて、突如として1月17日に阪神・淡路地域に大震災が起きました。奇しくも、この日は1年前のロスアンゼルス大地震が起きた日であります。アメリカでの大都市災害を教訓化することなく、大災害が引き起こされる結果となりました。阪神・淡路大震災を経て、1年有余の時を刻んだ今、阪神・淡路大震災から何が問われているのかを考えてみたい。

この大震災を私自身は自然環境と共生する方向ではなくて、自然環境を制圧する方向を生きてきた近代社会のあり方を根底から問う震災だと、考えていました。しかし、フランスの社会学者ジャン・ボードリヤール氏の問題提起にふれて、そういう視点からでは見えてこない問題があることを教えられました。つまり、阪神・淡路大震災を通して、私たちの近代社会が問われるだけでなく、日本社会の前近代性が露呈したのではないかという問題なのです。少々、長い引用ですが、朝日新聞(95.3.2)に載ったボードリヤール氏の提言を紹介しましょう。

## ボードリヤール氏の提言

ボードリヤール氏は「日本は経済的に豊かだといわれているのに、災害にあった多くの人々がいまもホームレスの状況に投げ出されていることには強い印象を受けた。国際的な富の蓄積はあっても、国内での再配分に問題があるのではないか。略。これは仮説だが、日本という国が豊かなのは日本人が貧しいからだという逆説も成り立つようにも思える。国が豊かであるためには、まず一人一人の個人が豊かでなければならないという欧米的な理想主義とは違うモデルがあるのだろうか。個人が組織の細胞の一つのようになって自己を主張しないのだとすれば、それは社会のシステムの前近代性が土台にあるのではないか」と、鋭く全体主義的な日本の社会システムを問題にしています。

もしボードリヤール氏がいうように不可避的な自然災害に重ねて、個人が組織の中に埋没して自己主張もせずに、国のために忍従を強いられているということに、大震災がもたらしたもう一方の現実があるとするならば、日本においては近

代社会が見いだしてきた「個の確立」という問題がいまだ未成熟のままだったということになります。

いうまでもありませんが、「個の確立」を推し進めてきた欧米的な人間観に問題がないわけではないでしょう。しかし、少なくとも、人生の責任主体を明確にするという意味においては、「個の確立」ということは不可避的な問題だと思います。それが日本においては、「個の確立」を育てるところか、弱めていく前近代的な社会システムがいまなお根深く存在するということは、戦後50年間の、いわゆる戦後民主主義を経験してきてもなお、侵略戦争の歴史を批判的に担っていくような責任主体が生まれてきていないという問題でもあるのでしょうか。そういう問題までもボードリヤール氏の提言から考えさせられます。

### 如来の「いのち」

もちろん、「個の確立」ということも、「いのち」のレベルまで考えれば、「いのち」はそこでいわれる個人のも物でもありません。「いのち」は何かのための手段であるとか、道具であるとかというものではありません。「いのち」は「いのち」そのものの働きです。強いていうなれば、如来の「いのち」であります。如来の「いのち」という言葉を実体的に捉えられては困ります。私どもが何かのために「いのち」を私有化することは許されることではないという批判的原理を現す宗教的言語表現として理解してもらいたいと思います。

このような如来の「いのち」を自損他損する現実が端的に言えば戦争というものであります。大震災は戦争ではありません。しかし、如来の「いのち」を全体（国・家）のために無視してきた社会システムが、これだけ多くの被害をもたらしたという意味では、今回の大震災は戦争と同じく人災という側面を否定することはできません。

その意味では、敗戦後50年の節目に、私たちは、凶らずも、阪神・淡路大震災というかたちで、人間としての主体を埋没させる前近代の社会システムと、さらには人間としての主体を硬直化させる近代の社会システムの両面から、自己自身を奪還していかなければならない課題が与えられたのではないのでしょうか。その中で、どういう世界を見いだしていくことがほんとうに人間として生きることとなるのかが問われているのでありましょう。

私自身としては、このような問いを問うていく方法としては、今回の大震災後

の取り組みの中で、社会の枠組みを超えた有形無形のボランティア活動が目されましたが、このような人間の動き方の中に、大震災によって問われた人間の生き方を考えていくKeyがあるように思います。

ところで、昨年、私が住職をしています寺院で、阪神・淡路大震災で被災された方々への支援ということで、チャリティコンサート（韓国人留学生李恩莉さん〈当時名古屋音楽大学学生〉の演奏）を行いました。村の内外からたくさんの方が来られて盛況でした。この4月にも予定をしています。これからも行動しながら大震災から問われている私たち自身と私たちの社会の在り方を考えていきたい。



『ともに生きる』奥深さ

同朋大学 学生課

栗田 暢之

あれから、もう随分時が流れたように感じる。あっという間の1年だった。何から語ればいいのか。どこから伝えていくべきか。本当にいろいろあった。同朋大学の歴史の1ページを刻むであろう今回の支援活動は、それを振り返れば振り返るほど『ともに生きる』大切さを示唆してくれる。そこには、人と人が本当に出会っていくという無二の感動と喜びがあった。しかし、その裏側では、こうした人との交わりができなかった学生も決して少なくなかった。この現実

当て、今後の問題提起としたい。

## 1. 無我夢中の日々（被災地での現実）

地震発生から、ボランティア派遣を決めるまでに10日間、実際に被災地へ行くための準備に同じく10日間、合計20日余りが経過した95年2月6日、被災地でのボランティア活動が始まった。錯綜する情報に、どれが一番正しいのかも見分けがつかないまま、とにかく駆け付けた。最終的に延べ1,452名もの学生が関わったのだが、人が多ければ多いだけのボランティア観が飛び交った。そして当初の「少しでも役に立ちたい」という純粋な気持ちは、やがて「こんなはずじゃなかった」という現実とのギャップに突き当たる。TVなどの影響か、誰もが被災地での直接救援をイメージしていた。しかし、実際にこの活動に関わった者はほんの一握りで、多くは間接支援に携わったのである。例えば、体育館に山積みされた救援物資の段ボールを一箱ずつ開け、中身を取り出し、種類別に分けるという、何とも気の遠くなるような作業の繰り返しであったり、兵庫県の機能が途絶えたために隣の大阪府が全面支援をしていた関係上、被災地ではない大阪のビル内で、書類の整理や電話の対応に明け暮れた者もいた。被災地へ入った学生でも、実際には集まり過ぎたボランティアの中に埋もれ、一日中ぼーっとしていた者、ボランティアと被災者の心の壁の厚さを痛感し「自分たちは悪いことをしている」錯覚に捕らわれた者、被災者から「お前らに何が分かる」と胸倉をつかまれた者、他のボランティアとうまく連携が取れなかった者……、ずいぶん傷ついたことであろう。一人涙して、床についた者もいるという。なぜそういう学生達をきちんと見なかったのであろう。なぜもっとコミュニケーションをとらなかったのだろうか。今となっては、ボランティアの心のケアとか、バーンアウトといった言葉を、まるで他人事のように捕らえていた自分が情けない。本当に胸が痛む。それでも真面目な彼らは、黙々と与えられた役割をこなしていった。一人ひとりが無我夢中で、それぞれが不安定な自分の位置を、自らが確認していくという、酷な日々でもあった。

## 2. 「がんばり」過ぎた（大学からの支援の継続）

被災地での活動に一応の終止符を打ち、4月からは同朋大学ボランティアネットワークとしてその活動が継続された。尚も支援が必要だと痛感したおよそ30名

の学生が中心となった。そして、何か大きなイベントがあると 100名を越える学生がそれに加わるという、自然にボランティアが集まる構図が出来上がっていた。つまり、部や会のように、個人が縛られたりすることのないことを目指し、新しく迎えた1年生も加わって、一応の成果をあげている。しかし一方で、いつも特定の者に負担がのしかかるという課題も抱えた。一方、もっと深刻なのは、同じように被災地での活動を経験した上で「もう関わりたくない」という学生とのずれが現在も残り、何かしら悶々としたわだかまりがつきまとっていることである。思えば、彼らと学内ですれ違った時、「こんにちは」と笑顔だけれど、視線をそらしたりした小さなサインを私は見逃していた。この溝は簡単に埋めることはできないだろうが、もし許されるのならば、いつか彼らとゆっくり話がしたい。今まで、DVNも私も「がんばり」過ぎて、きめの細かい交わりができていなかった。『ともにいきる』どころではなく、最初からやり直しである。

### 3. 新たなるスタート（2年目のDVNとともに）

「何か1つの目標に向かって突き進む」、これもいいだろう。しかし、ボランティアは、する側によほどの心の余裕がなければできないことを私たちは肌で知った。疲れたら、否、疲れる前にゆっくり休養を取り、いつかまた加わればいい。「がんばる」のも休み休みにしなければならない。さらに、できるだけたくさん  
の学生や教職員、そして今回の活動で出会った多くの仲間と語り合う機会が得られればと願う。一見『ともにいきる』具現化とも評されるボランティア活動であるが、その根底から互いに共生していくには、なかなか奥が深い。このことは、  
『ともにいきる』を建学の精神にすえた同朋学園の構成員の一人として、まだまだ学生らと模索していきたい大きな課題であるとも言える。でも、これからはもっと気軽に行こう。

最後に、実際に被災地へ行ったり、今でも支援を継続するためには、それ相当の条件が必要となる。私が今回、一連の活動に携わることができたのは、多くの人々の理解と支えがあったからである。これらの方々に心より感謝の意を表したい。

6千人を超える死者という想像を絶する甚大な被害をもたらした阪神・淡路大震災がおこってまる1年を迎え、同朋大学ボランティアネットワーク（DVN）より文集作成のための執筆の依頼があったが、ただ筆者は今回の大震災に際し、ボランティア活動に参加したわけでもなく、また現地に一度も足を踏み入れた事さえもないということ、つまり、筆者担当者としては適任ではないということ、まず最初にお断りしておかなくてはならない。筆者はただ募金とチャリティーバザーにほんのささやかな協力をしたにすぎない。従って、ここではテレビや新聞などのメディアを通じて得た情報をもとにして、いくらか考えたこと、感じたことなどを述べてみたい。

一般に、人はテレビの情報や新聞の報道などを通じて直接触れることのない遠隔地の情報を手にするが、ここで留意すべきことは、そうして得られた情報だけがすべてではないということである。つまり、テレビ画像としてあるのは、切り取られた部分に過ぎないこと、そして新聞の活字を通じて想像するだけでなく活字にならなかったこと、活字の背後にあるものにも思いを致して全体を構築すべきことである。大震災の場合でいえば、あのテレビ画像のいく倍か、比較にならない程の悲惨な状況があったであろうことを想像してみなければならない。

想像する力は人間に与えられた特性の1つと言えるが、時間が経つにつれ、そして介在する空間（物理的にも精神的にも）が多ければ多い程、想像力が貧しくなるのはやむを得ない。しかし何よりも大切なことは、いかに対象から時間・空間が隔たっていようとも、そこに自らとの関連性を見出し、意味づけ、我がことのように感じる精神であろう。言い換えれば、自らを他者と同一視する精神、喜びを共有し、苦しみを共有する精神こそがそこに求められる。仏教では前者を慈（メッター）、後者を悲（カルナー）と言う。つまり、他者の喜びを自らの喜びにし、他者の苦しみを自らの苦しみにする、ということである。今回の大震災に際しては、ボランティアはこうした他者との関係を見出し、取り結ぶまたとない機会であったろうし、被害を肌で実感する機会であったであろう。しかしボランティア活動をする、しないに拘らず、こうした福祉の基本精神とでも言うべきものを持ち続けることが、ともすれば萎えがちな我々の貧困なる想像力を鼓舞し、豊かにするであろう。以上、前段ではマスメディアというものの限界性に関連づけて、後段では福祉の精神という視点から想像力の重要性を、自戒を込めて述べた。

想像力という点でもう1つ思い起こすものがある。2年ほど前、旧東ドイツとチェコにあるナチス時代の2つの強制収容所を訪れたことがあった。誰かにチェコのテレジン強制収容所で目にした収容されていた子どもたちの描いたたくさんの絵には、その絵の幼さと

無邪気さに比して、その後の子ども達のたどった運命を思いやると（死亡年月日と年齢が書き添えられていた）暗然たらざるをえなかったし、旧東ドイツのザクセンハウゼン強制収容所で見た焼却炉の跡には、少なからぬ衝撃を受けたが、蚕棚のようなベッドの並ぶバラックを見ても、銃殺された際にできた壁の銃痕を目にしても、それほど強い衝撃を受けることはなかった。そこはアウシュヴィッツのような絶滅収容所ではなかったが、それにしても両強制収容所で何万人もの人が殺されているというのに。わが想像力の貧困、欠如を笑うべきか。後に、映画「シンドラーのリスト」を見てはじめて旧時を彷彿させたのである。この例から一般化はできないかも知れないが、現代人は昔の人に比べて想像する力が弱くなっているのではないだろうか。現代人の過剰なオーディオ・ヴィジュアル志向が感性を鈍麻させ、想像力を衰弱させているのかも知れない。また現代の複雑な社会構造の中にあっては、人と人との本来的な相互依存的関係性が見えにくくなっていて、そのことも想像力の貧困の一因となっているのであろう。ジョン・レノンの歌にあるようにイマジン（i m a g i n e）の心を大切にしたいと思う。

筆者は社会福祉を専門とする者ではないが、一昨年より社会福祉学部に所属し、現在は基礎ゼミも担当している。ゼミの学生の中には、今回の大震災でボランティア活動に参加した者も多くいて、その感想を語ってもらったこともあった。その中で、難波別院という活動の拠点を提供してもらって大変ありがたかったことと同時に、恵まれ過ぎているという思いもあって、被災者にこそこの場が提供されるべきだと考えた人もいたようだ。またせっかく来たのに、被災者と直接かかわる部署への配属ではなかったため、多少不満に思った人もいたようだ。これなどは、ボランティアというものの自発性、直接性、無償性を考えさせる好事例であろう。役に立たなかったという思いもあったかも知れないが、何かしたいという思いから、被災地に駆けつけただけでも意味はあったであろう。「あなたがたに関心をもっている人が今ここにいる」ということを示すだけでも意味はあると思う。30数年前、筆者が中学生であった時、伊勢湾台風があった。今回の大地震同様に甚大な被害が出た。筆者の住んでいた所はたいした被害はなかったが、それでも九州の見ず知らずの学校からの慰問の品と生徒達の手紙が届いた事があって、何かしら嬉しかった記憶がある。「私達もあなたがたに関心がありますよ」というメッセージに心が動かされたわけである。

私達は決して1人では生きられない。他者との相互依存的な関係性の中で存する。（仏教ではこれを縁起という）。ボランティア活動に参加した学生の感想文の中にこんなのがあった。「助けた人から助けられることがないとしても、その人がまた別の困っている人を助け、またその助けられた人が、他の人を助け、そして自分も誰かに助けられて——人間はそうやってつながって、みんな助け合って生きていくものだと思う。もし人間が1人で生きてゆけるのなら、きっと神様は1つの星に1人の人間しか作らなかつただろう。」

私たちは日常生活の中においても、この人と人とのつながり、人と自然との関係性に思いを馳せ、想像してみることが大切であると思う。

最後にDVNに対して2、3の意見を述べてみたい。大学側のリーダーシップを離れ（我々も側面から応援するが）、名実ともにボランティアの名にふさわしい自主的な組織にすることと、既存のサークルとどう関係づけるか（組織図はできているか）、外のみならず内なるネットワーク作りにも心掛けてほしいということである。もう1つ付け加えるならば、ボランティアに行かなかった人、行けなかった人に対して差別感を持たないことである。言うまでもなくボランティアは自発的な行為だからである。



私は毎日曜日の朝7時半から1時間、NHK教育テレビで放送される「こころの時間」を、余程のことがない限り聴いている。私にとっての“勉強の時間”である。多様な宗教家と実践者、学者の語る言葉に、人間とは何かを深く考える時を与えてくれる。

96年1月14日は「弘法大師・空海の詩文から」で、高野山大学元学長の高木坤元氏が「性霊集」の語り伝えるものについてだった。

『法身何かにある 遠からずして 即ち身なり

智体何ん わが心にして 甚だ近し』

『三味の法仏 本よりわが心に具し』

先生は「真実のありようを自覚すれば、慈悲の行動にあらわれる。清らかな心はすべての人がもっているのだが、気がつかないのです」と説いていた。私はこれを聞きながら、アメリカのロバート・コールズ・ハーバード大学教授の書いた「The Call of Service」という本の中の分析を思い出した。児童心理分析の世界的権威で、「子どもの精神生活」など50冊に及ぶ著作を世に問うている。学生運動や人権差別問題で激しく揺れた南部の紛争地に入って、あらゆる人たちの声を直接聞きながら、学問体系を確立していった行動派の学者である。

「人間はどんな人でも、たとえ犯罪者であっても、次の4つの特質を持っている。それは、sympathy, fairness, self-control, duty である」という意味のことを書いていた。つまり、同情(あわれむところ)、公正さ、自己抑制、義務感と書いていだろう。この特徴がすべての人に備わっていて、社会の安定化への働きをしているというのである。

さきの性霊集の言葉を真実のありようを自覚(公正さ、自己抑制)すれば、慈悲(同情)の行動(義務)にあらわれる、と解釈してみたのである。「清らかな心」とはその4つの特質に置き換えることができるのではないかと考えた。洋の東西を問わず、人間とはどんな存在なのかを探る中で、同じ頂点に達するのではないだろうか。

昨年1月17日の阪神・淡路大震災の直後から、国民的な力となって活動したボランティアも清らかな心に支えられていたのである。私は1月末に学生に呼びさまされた支援活動へのうねりに感謝している。2月1日に行われた救援活動説

明会に集まった120人の学生の熱気を、今も強く感じている。同朋大学の伝統が実践となってあらわれたのだと信じている。2月5日、救援グループ第1陣が名古屋駅西からスタートした。受け入れ先の難波別院の設備と若い僧たちの温かな心にも感激した。それから約2ヵ月間、学生は戸惑いながらがんばった。大学ノートに書き込まれた思い思いの記述には真実が浮き彫りになっている。私は時々、この写しを取り出して励みにしている。

大阪ろうあ会館、障害者救援本部、大阪障害者センターを当面の拠点として、学生たちの活動は多様化していったが、淡路島の北淡町にもボランティアは活動の場を与えられた。そこで出会った人たちとの心の通いは貴い。難波別院との関わりで、芦屋市で仮設風呂活動をしていた、大阪教区第1組明福寺住職、巨津(おおづ)善祐氏の支援にも参加した。

『月間福祉10月号(95年)』に「阪神・淡路大震災における支援活動を通して学んだこと・提言」が特集されているが、「専門職としてのボランティア・コーディネーターの確立と量的拡大を図るとともに、災害時を想定した訓練、研修を行う必要がある」と記されている。

巨津さんは日ごろから大阪ボーイスカウト活動を続けている。サーバイバルを常に考えて行動し、青少年指導の第1線に立つ人であった。それだけに実践に裏打ちされた指導力は、震災直後にとどまらず、芦屋市役所と強い連携をもって、仮設住宅の居住者に支援活動を続けている。

災害救援活動は3月末で一応区切りをつけたあと、DVNを結成した学生が巨津さんと連絡をとりながら、仮設住宅に暮らす人たちの支援を続けているのは、今後のボランティア・コーディネーターの役割を学ぶ上でも大切な働きである。

「夏休み中の活動報告書」にあるように、暑いさ中の9月4日、15人の学生が巨津さんの案内で、芦屋大学グラウンド内の仮設住宅を訪ねた。この粘り強さがどれだけ私たちを勇気づけるか測り知れない。年末年始の募金活動も多くの市民に強いメッセージとして伝わったに違いない。

西宮市の自宅で震災に襲われた作家の藤本義一さん(62)は、両親を亡くした113人の遺児らのために、談話室や遊び場を備えた「希望の家」の建設に取り組んでいる。1月15日付朝日新聞『ひと』欄で「素直だった子が突然、乱暴になったり、口数が減ったり。心に傷を負った子どもたちが心のマッサージができるかけこみ寺にしたい」と語っている。いま、1年たって新しい、そしてさらに難しい課題と取り組むボランティア活動が生まれている。

真宗大谷派大阪教務所が発行する月刊新聞『南御堂』6月1日号で、巨津善祐氏の震災とのかかわりを少し長いが引用してみる。

「3時間を要して芦屋に着いたが、傾いた本堂(注：友人のお寺)に毛布にくるまった人の目だけが異様に私をにらみ、その傍らには遺体も並んで横たわっていた。その状況を現実として見た時、友達の『来て』という言葉が被災者個人のものではなかったことを知った。そこには、自らが被災していながら小さな寺を目一杯開放し、必死になって縁ある人に手を差しのべている住職夫妻の姿に触れた時に、正直『これはすごい』と思った。私はボランティア(この言葉は嫌いだが、奉仕よりましなので仕方なく使う)はこうして始められたのだが、動きの中でいつも聖道の慈悲と浄土の慈悲の言葉に出会っている。今だに何がよかったのか悪かったのか『善悪のふたつ総じてもって存知せず』との歎異抄のとおり、自己満足にすぎなかったようだ。——」

巨津さんの思い悩む姿が目浮かぶ。彼の献身が多くのボランティアや被災者の心に働き、その活動の輪と精神がひろがっていることは確かである。人間の行為が目に見えて世の中を変えるようなことはないし、ボクシングでいうボディ・ブローの効果に似た静かに浸透する力となっていくものだろう。つまりリコーズ博士のいう4つの特質が活発になり、社会に還元されていくのである。高木光生の解説にあった静かな心は熱くなるに違いない。DVNの働きも同じことで、社会の多くの同志とともに、いざという時の社会の連帯感を生み出す力となっていくと考えている。それが『月刊福祉』が提言する「ボランティア団体同士の連携、後方支援が重要である」との主張にこたえていく道なのである。



あの朝から、「もう」1年が経ちました。被災地から遠く離れ、日常の忙しさの中で、ややもすると大震災のことを忘れがちな私にとっては「もう」なのですが、今も現地で大震災が残した爪痕と生活を懸けて戦っている人にとっては、「まだ」かも知れないし、「やっと」かも知れない、あるいは、そんな言葉では表せない程の1年だったかもしれせん。

あの朝、私はヘリコプターから絶叫するアナウンサーの声で目を覚ましました。しかしテレビが映し出す映像は、遠い世界の出来事のような、あるいは夢の続きを見ているようなものでした。そんな私を夢から現実の認識へ導いてくれたのは、バスでした。崩れずに残った高速道路の端から、車体の半分を宙に浮かせてかろうじて落下を免れたバスに、私はこれが日本の神戸で起きている現実なのだ気付かされました。それからの報道は周知の通り、大震災の大きさと、その悲惨な被害を次から次へと私達に伝えてくれました。同朋大学でも、学生課の栗田さんや大阪の難波別院の計らいで、ボランティア活動の目処が立ち、ボランティアをしてくれる学生を募集しました。後期試験の最終日に集まるよう掲示し、期待と不安でその時を待ちました…。うれしい悲鳴でした。J304教室が満員になったのです。100名を越す学生諸君が学生課の呼び掛けに応えてくれました。DVNの始まりでした。

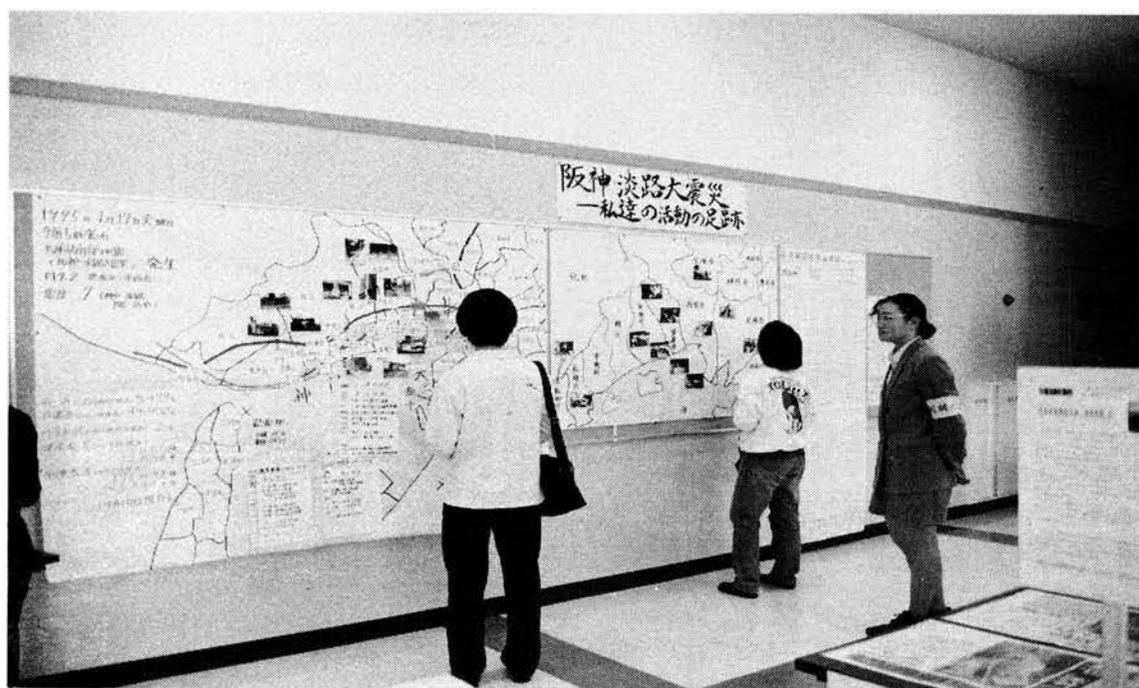
第1陣のバスを見送ってほっとしたのも束の間、現地からは驚きと活動のありさまを生々しく伝えるファックスが送られてきました。活字が踊っていました。それから2ヶ月間のボランティア活動には、DVNの発足を当然とさせる程の勢いがありました。3月末に難波別院で見た学生諸君の顔は生き生きとし、その言葉は自信にあふれ堂々としていました。

1年経った今私たちに届けられる報道は、阪神復興の難しさを伝えるものがほとんどのように思えます。それと同時に、ボランティアそのものも量から質へ、全体から個別へと変化を余儀なくされているようにも思えます。現地に行けば何かあるだろうと現地入りしても、そこには何も仕事がないなどということが5月にはもう言われ始め、ただ漠然とボランティアをと思って行った人は、かえって足手まといになったという事もあったわけです。被災地はいつまでも被災した時のままではないのです。従ってこれから必要なのは、現地の確たる情報を得て何がしかの目的を持ったボランティアであり、自分たちにできること、それも人より優れてできる個性ある能力を持ってするボランティアであるように思います。

多くの人たちが大震災で家を失い避難所生活を始めた時、すべての人がボランティアを

必要としていました。その中から、生活を元に戻していく資力や若さのある人が抜け、親戚などの手助けが受けられる人が抜けるなどし、そこには何等かの理由で抜け出す術を持たない人たちが残りました。ボランティアも縮小されていきました。しかし、ボランティアがいなくなったわけではないでしょう。そこにはより専門性の強い、質の高いボランティアが求められているのです。そこに住む一人ひとりの言葉に耳を傾け、知恵を集めて解決に導く粘り強い活動が必要なのです。仮設住宅や福祉施設、あるいは一見何の手助けのいらぬかのような人たちの中にも、一つひとつの個に対応できるボランティアを求めている人や場所は、まだまだ多くあるように思います。

今後のDVNに望むことは、阪神ボランティアに限って言えば、1年間の活動実績を踏まえ、そこで得た震災ボランティアのノウハウをしっかりと後に伝えることと、自己の資質を高め、望まれて活動できるボランティアになることです。



阪神大震災から一年になるという。一年前のこの日、私は、研究会出席のため、大阪へ出かける予定であった。中川区の自宅で、朝、大きな揺れを感じ、飛び起きた。地震らしい。しかしまあ、大丈夫だろう。大急ぎで、広島行きの新幹線に飛び乗る。しかし一向に発車する雰囲気がない。近鉄は動くという。急いで近鉄に乗り難波へ。しかし、自分が乗るはずの地下鉄御堂筋線は動かない。どうやらとんでもないことになっているらしい。目的地にたどり着けないまま（目的の研究会は中止になった）、名古屋に帰った私の目に飛び込んできたのは、テレビや新聞が伝える、被災地の悲惨な情景であった。

この地震が、我々につきつけたのは、営々と築いてきたものも、一瞬にして消えてしまうことのむなしさである。もろくも壊れたのは、戦後の高度経済成長、及びバブル期のみせかけの繁栄である。いいかえれば、経済発展ばかり追い求めたつけである。そしてそのつけを最も多く払ったのは、長田町など「発展」に取り残された部分であったのは皮肉である。

私は、職業柄、アジア諸国を訪問することが多いが、アジア（日本以外の。「アジアと日本」というように、まるで日本がアジアでないかのように書いてあるものもあるが、変だ。）も今、急成長の真っ最中である。しかしながら、単に経済発展ばかり追い求めるとどこかでつけを払わされる。お隣り韓国では、すでにそうした状況が訪れている。ソウルのデパート崩壊はそのいい例である。

それでもなお、障害者の救済は後回しにした方がよいなどという人もいたのには、驚きである。健常者を救済した方が、復興の効率がよい、というわけである。戦後の「発展」もっといえ、産業革命以後の近代文明には、この「効率」を中心に考えてきた。神戸はこの発展のシンボルであった。阪神大震災は、この「発展」を至上のものとしてきた近代文明に反省を促したのである。この点をよく考えず、復興に際しても、「効率」を至上とするならば、今後も、同じことをくり返すだけだろう。これは、急激な経済発展を続けるアジア諸国の人々に対しても、叫ばなくてはいけない点なのである。

この震災から学ぶべきことは、緊急時の援助が間に合わない時、当事者同士の助け合いがどれ程多くの人を救ったかである。これは、「効率」云々ではない、理屈抜きのものである。そしてボランティアの大切さを皆が知ったことである。しかしながら、ここに、日本的な落とし穴がある。一度、大きな事件が起こると、全てがそちらに向いてしまう傾向がわが国にはある。極端にいうと（これはかなり極端だが）、震災のボランティアにいかないと「非国民」であるかのような風潮さえ生まれかねない、お国柄である。震災の援助はもちろん大切である。しかし、ボランティアを必要とする人たちは、日常的に存在して

いる。ごく日常のありふれた生活を大切に、相互扶助の原点にたちもどること。震災から学ぶべきことは多くあるが、この点こそ確認しておくべきであろう。

DVNは、震災をきっかけにして、ボランティアにかけつけた学生が中心となってできたという。皆が、ボランティア活動を通じて、多くのことを学んだことは、想像に難しくない。今後は、この経験を生かして、日常のボランティア活動のネットワークづくりへと進みつつあるという。しかしながら、この一年は、従来のボランティア系のサークルとの関係もあいまいなまま過ぎてしまったような感がある。外部とのネットワークづくりもさることながら、自らの生活基盤である大学内部のネットワークづくりも大切である。足もとを見つめることは原点なのである。また、学生課や教員に頼りすぎることのないよう、真に自立した活動へと進めることも、これからの活動の課題であろう。

「ボランティア」という言葉は、「自発的に行う」ことを意味し、「ただでやる」という意味ではない（「ボランティアをお願いします」と、人に頼むなどの、勘違いがよくある）。また、一方的に施しをすることでもない。「援助」という言葉もあるが、これは、助ける者と、助けられる者との関係を固定してしまうかのような印象を与えるので、私は好きではない。助けるものは、助けられる者からも何かを学ぶものであり、また状況が変われば、助けられる者にもなる。こんな相互扶助のネットワークが日常に存在しうることにすなおに目を向けたいものである。

日常に存在する相互扶助のネットワークは、「地域」というものを考える上でも重要である。一つの「地域」には障害者や老人もいれば、外国人労働者もいる。皆が相互扶助のネットワークで結ばれるのである。このためには、地域の本来もっている潜在的な力に耳を傾け、何をするのがその土地には優しいのか、を考えていく必要がある。地域本来の持ち味を見つめるとは、いわば、地域の自然治癒力を目覚めさせることである。従来は、「村起こし」「地域起こし」の名による「地域の活性化」が進められてきた。現在でも、万博を誘致しようとか、首都を呼ぼうとかいう、一時代前のような、活性化への動きも未だ存在している。「村起こし」「地域起こし」とは、外の力をカンフル剤として用いることであり、病人を無理やり薬づけにするのに似ている。「地域起こし」から「地域の自然治癒力の目覚め」へ。これが、これからの我々のめざすべきことである。

震災当事者の相互扶助の力強さは、私にこんなことを考えさせてくれた。

これで何回目だろうか。机に向かい、原稿用紙のマス目を埋めて行くのだから、行き着くところは、何か違うという感じで、それが手の動きを止めてしまう。

「いのちある限り、生きて記憶せよ」と内なる声は命じるが、「生きて記憶せよ」と発することが多い。内なる声が出したメッセージを出す事柄が、多発している。長崎の雲仙、奥尻の津波、93年の冷夏、地下鉄サリン事件の被害者、「いじめ」により自殺する子どもたち、実の親に虐待されている子どもたち等々。

大きな意味を持つ事象なのに、その「大きさ」について、その出てきた背景なりを、立ち止まって考え、いのちに想いをさせる「時間」がない。いや時間はあるはずなのだが、まるで、エンデの「灰色の男たち」が無意識のレベルにまで入り込んで、時間をくわえこんでいるような日常だ。

マス・メディアによる感性の鈍化、想像力の枯渇、刺激が強すぎて感覚が麻痺。「激動の時代」と一言で形づけることはできるが、それでは解けない。

風船が勢いよく膨らんで、萎んだような、そんな有様。社会福祉の業界では、「社会福祉協議会が機能しなかった」とか、「いや、それなりに動いたが、行政にしばられた」とか、また、被災した社会福祉研究者が、あちこちに顔を出して報告したりしている。しかし、関東大震災の折のような、社会事業に大きな影響力をもたらしたような、そのような「うねり」になっていない。その辺がうまく解けないので、筆が進まない。

4種類だかの風邪のウィールスからようやく解放されて、2年のゼミの補講で、「神戸にボランティアに行く」と言う学生に、「手話もできないのに何しに行くの」と答えた。これには2つの認識不足があって、同朋大の手話サークルが活発に活動していてその全員が手話ができ、そういう学生たちが行くものと思っていたこと。2つめには、震災地に求められる助けは、時間の経過とともに中身が変化すること。はじめは瓦礫を動かす力仕事ができる人。

この認識不足には、ある種の思い入れ、思い込みが深く作用していた。社会福祉学部に通っているからには、一般学生と違う活動をしてほしいとの思い。

学生課の募集したボランティアに応募した学生の学年は、1, 2年が大半だったという事実。4年生は、卒業目前で不参加は無理もないとして、3年生の参加者が1, 2年生に比べて少ないことは何を意味しているのだろうか。大学への志望動機の「熱い胸」の「熱さ」の程度が、阪神への活動を1, 2年生とに合致したのか。3年生は、自分の修得中の専門技術を生かすことはできないと冷静に判断したためなのだろうか。

ニードに合わせて、社会資源を調達し、動員するという活動や関係機関への連絡調整等

ソーシャルワーカーとしての活動そのものと言ってもいいものが、社会福祉を学んでいる学生たちによって、十分に実践されなかったということは、大学における社会福祉専門教育の問題性をつきつけているとも言える。特定の状況、場面で生かされない技術。将来のソーシャルワーカーとして養成されているのか。

参加した学生の所属を見ると、大半が社会福祉学科だった。仏教学科の学生がもっと参加しても不思議ではないように素人眼には思える。とすると、教育理念が学生個々に浸透していないということなのか。それは何故なのか。

難波別院という、寝床と風呂と洗濯機と、9時までにもどってきてのミーティング、その時間までの、何人かの見知った顔の学生に、きょうの活動を話す、という具合に、拠点というのか、ボランティア先からもどる「場所」があったこと。阪神のボランティア活動に限らない、普段の生活でも、その日の出来事とそれへの情動を表出できる場があることによって、人はその精神的安定を保っている。「パパ」と呼ばれる学生や「おかあさん」と呼ばれる学生がいたことは、それらの役割を無意識に表現したものだろう。

その点からすると、淡路に入った学生たちは、同期大学の学生という所属をとられ、言葉もかわさない立場に置かれ、かなりきつい状態ではなかったかと想像される。「独り」の性分がっている学生を除くと。

等々考えつつ……。



## 編集後記

さて、いかがでしたか。これまで多くの人の震災を通じての思いを読んでいたと思います。ほとんどの学生の文章は2月から3月にかけてのものであることがわかると思います。この2カ月の間に学生は自分の考え・思いでたち、何かできないかと現地へと飛んだのです。この中に私もいました。

私達は何も知らないまま、ただ気持ち为先走り、現地を駆け巡りました。中には泊まり掛けで被災者の方と触れ合った人もいれば、物資の仕分けで触れ合う機会を逃した人もいました。避難所に足を運べた人は何らかの満足感を得られたのですが、ただ毎日同じようなことをしていた人には物足りなさやもどかしさがつのり、夜、難波別院で「ボランティア」という言葉の討論が始まるのでした。

私達はボランティアを通してさまざまな出会いがあり、別れもありました。学生ゆえのボランティアとわかっていても、学生ならではの春休みを利用したものであり、4月が近づくとつれ名古屋に帰らなければならないという苛立ちと、4月を過ぎてもたまの休みにしか活動できず、学生という立場を呪ったり、励まされたりしました。

この文集は、そんな学生の立場から作り上げたものです。私達はこうした「ボランティア」を経て何かを思い、感じています。それはひとりひとり、違った思いでもあり、またみんなが感じたことでもありました。この思いを忘れてもらいたくありません。またこれから震災に限らず「ボランティア」を続けていく人、これからやろうと思っている人に「ボランティア」という言葉に疑問を持った時にこれを読んでいただきたい。そして自らの答えを見いだすことに役立てて頂ければ私達がこの文集を作った意義があるというものです。

最後になりましたが、この文集を作るにあたり文章を寄せていただいた学生、諸先生方、震災により知り合った方々に御礼申し上げます。

同朋大学ボランティアネットワーク  
感想文集制作班  
発行責任者  
松田 耕治

## 《感想文集制作班》

廣瀬 結子

浅田 由美子    一ノ木 礼子    伊藤 惠美  
岩瀬 理津    梅村 真里子    吉島 加奈江  
小林 紀子    中野 季里子    名畑 玲子  
野呂 知美    藤田 則子    森田 愛

平本 雅彦    松田 耕治

浦野 愛

## -SPECIAL THANKS-

愛知BBS会の皆様、一寸法師の皆様、おむすびの皆様、施設問題研究部の皆様、  
視聴覚研究部の皆様、心身障害福祉研究会の皆様、社会保障問題研究会の皆様、

FATHERS & MOTHERS

ABEchan, AKIHIKO, DEEN, FREDDIE MERCURY, FUMIYA FUJII, FUSAKO ARUGA, hanayo, HIDE, HIDEAKI SUWA,  
HIROMICHI, H. R. GIGER, IWATSUKA-Record, KAORI, KAORI TSUCHIMATU, KAZUKO NAGATOMO, KIEKO ÔMIYA, KOHJI SHIBATA, KUMI,  
MAKOTO, MAMI NISHIO, MASAHIRO ÔNO, MIYUKI HIDAKA, RAYMOND G WATTS, RINGO-JAM, SÂKURU-K, Mr. Volunteer  
SHINOBU YONEZAWA, SOFT BALLET, sho-in-53013161, TOMOYUKI ITOU,  
TUSK, ZARD, ZARU&CHYABU, YÔKO HIRABAYASHI, YOSHIKI, YUKA,

学園関係者の皆様

同朋大学学生課

朝日新聞

阿部 由希子, 生田 淳, 大上 智恵, 大歳 明子, 金澤 浩子, 亀山 香織,  
川村 顕治, 北鬼江 慶子, 坂井 敏子, 下山 恵理, 鈴木 晃, 瀬崎 恭代, 高島 大助,  
竹内 務, 田中 和代, 辻村 季代子, 塚本 直人, 中村 ゆみ, 中屋 真理子, 野村 幸伸,  
平野 敬子, 平松 恵美子, 牧野 茂, 間杉 宗臣, 山崎 百合子, 山田 久美,  
山本 聖子, 山田 卓由, 山田 健雄, 吉村 文恵, 米丸 正義, 渡辺 昌代,  
宮嶋 智也

DVNの皆様

その他、制作に携わって下さった大勢の皆様

&

YOU

(五〇音順 敬称略)

